新和歌類句集八

第四句
五代集
後拾遺乃

特別
イ4
3163
22(8)

青
44
3163
22(8)

新和歌類句集

む

風 非 新拾 羇 新拾 恋二 新拾 尺 新拾 冬 風 恋一 新拾 恋一 新拾 雑中 新続古 雑上 新千 雑下

むらさめ
むらさめの
むらさめの
むらさめの

やしひわ　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　和気信成 羽淀
札　待宵し　せかれゆく雲のなよわゝのあけをうらみき　羽平門院
雑上
恋五　今になり　むしにうちもふ袖よ秋の心　永福門院 内侍
月　新下　我ものゝ　せかれゆく雲をなれいさ月をも待宵し　光明峯寺入道前太政大臣
新拾　恋下　月　尺　むしまろ時はまの浦の夕なぎに　清原深養父
新千　恋四　君が代を　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　永福門院
恋五　月　夏　ちぎりおきて　むかふ山路の秋の夜を　権中納言雅世
札　雑下　ふりぬ　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　武部卿 恒明親王
新千　雑上　音ふ　せうとつのくらの山越えてこのふもとの下道　権三位俊基
新拾　旅上　秋乃月　むかふ山路の秋の夜を　山路入道前太政大臣
新千　哀傷　ふりぬ　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　前大納言為氏

新拾　神　天地乃　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　読人不知
新千　恋五　をさゝの　せかれゆく雲のなよわゝのあけをうらみき　前大納言為家
新千　雑下　ふりぬ　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　前大納言為道 基
新千　恋五　今もなを　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　三条内大臣 前関白
札　雑下　やそなれ　せかれゆく雲のなよわゝのあけをうらみき　為家卿集 歌
新千　雑上　何事も　むかふ山路の秋の夜を　上西門院 統子内親王
札　雑下　契しも　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　読人不知
新千　恋五　心にも　せかれゆく雲のなよわゝのあけをうらみき　三位局 歌
新拾　恋下　わすれ　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　永福門院
新千　雑上　九重乃　むしまろ月ゝ月ゝ哉ゆふれをうつせうみのあけ　宣政門院

拾遺 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

新古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今六帖 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

拾遺 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

新古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今六帖 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

拾遺 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

新古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今六帖 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

拾遺 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

新古今 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

古今六帖 雑上
ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

同 雑中 まつくき
凡 はりとれ
巻中 新拾 おうち高
冬 新拾 忘もめや
新上 新拾 ありも乃
雑 城 新千 芝父母
新千 冬
新続古 新下 新拾 人
新千 哀傷 新拾 恋二
同 恋三

新拾 恋一 うしそん
新拾 新上 なりそ
同 哀 死軽も
同 恋三 そうそ乃
凡 恋二 つゆも
新千 新上 思事
新拾 新上 かそ乃
新拾 恋三 こよひ又
新千 新下 こゆ出一
新下 同 今ハ我
凡 新中 ゆそう
在中 むなしきあとを

むりも知とに何とそうあはん 保詮信
むりしのむれかうれ 業中納言 定家
むりひれをのむ河面そよふみよみ 冬 同
むよみりくまとに道も井れ花れ面家 業大納言 定家
むをけうさの北水やこりもそねさ 源和氏
むもめうれ石い面世の秋もみ流 人 不知
せそうおもりれさ 大蔵卿 行宗 内大臣 母
むりそうえて出別地よ面より 伏見院御製
むりおうひうさうふ 伏見院御製
むりくゆうまうわ 権大納言 為定 卿
むりれ神ふ面世そ 業中納言 定家
むりさふれてあっよ面世て 権大納言 為定 卿
むりてゆとれ 花園院 御製
むなしきあとを 雪玉 大僧正 為守
凡 不知

新拾哀　名にしおはゞ逢坂山のさねかづら　前中納言定家
新千秋下　秋吹かぜの声ばかり　権中納言公雄
新千秋中　夕されば野辺の秋風身にしみて　鶉鳴くなり深草の里　皇太后宮大夫俊成
新拾冬　さゆる江の芦間の氷うすければ　千鳥なくねに月ぞ更けゆく　前大納言為家
新千恋一　ながめつゝ思ふもさびし我が宿の　軒端の松に秋風ぞ吹く　従二位家隆
新拾恋上　ものおもへば沢の蛍も我が身より　あくがれいづる玉かとぞ見る　権中納言定家
新千雑上　月前恋といへる心を　ながめつゝ思ふもさびし我が宿の　軒端の松に秋風ぞ吹く　前中納言定家
新拾雑春　山ざくら咲きそめしより久方の　雲井にのみも見ゆる吉野は　従二位家隆
新千雑中　ながめやる袖の氷も解けそめて　霞に曇る春の夜の月　前大納言為家
新続古　さゆる江の芦間の氷うすければ　千鳥なくねに月ぞ更けゆく　前大納言為家
新千雑中　ながめやる袖の氷も解けそめて　霞に曇る春の夜の月　前大納言為家

新千恋一　うらむとは思ひもよらず我が袖の　涙ぞ袖に余るばかりは　伏見院御製
新千恋一　もゝしきや古き軒端のしのぶにも　なほ余りあり昔の月　前大納言為兼
新千恋二　わすれじと頼めしことは忘れずや　心ばかりは変はらざりしを　従二位家隆
新千恋三　これやこの世にては逢ふ事を　またあの世にも恨みよとてか　後京極摂政前太政大臣
新続古　こゝをまた出でてやいかにながむらん　故郷人の袖の露けき　後鳥羽院御製
新千雑上　もゝしきや古き軒端のしのぶにも　なほ余りあり昔の月　前大納言為兼
新千雑中　むかしたれ植ゑおきてけん我が宿の　花の主を知る人ぞなき　後鳥羽院御製
新千雑中　むかしたれ植ゑおきてけん我が宿の　花の主を知る人ぞなき　後鳥羽院御製

新続古
春上
新拾
春上
風
雅中
新葉
雑上
新拾
雑下
新続古
雑上
風
雑中
新千
署
新拾
雑下
新拾
雑下
新拾
恋二
新続古
春上
新続古
雑上

春くれて花ももみぢもなき山に
いかにせよとて風の吹くらん
民部卿為
忠

ものごとに春惜しむ心は
あすか川流れてはやき月日なりけり
小弁

まかくれて夕べもとまる
ものゆゑに月をぞ待つ
院一条

ゆく秋を
いかにとてかは
とどめまし
紅葉ぞ
風の
手向
なりける
後西園寺
入道前太政大臣

ゆく秋を
とどめぬ
ものと
知りながら
なほ
恨めしき
大納言
為
兼

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
前中納言
定
資

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
後京極
摂政
前太政大臣

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
後鳥羽
院
御製

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
花山
院
御製

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
前大納言
為
世

ゆく秋の
名残
惜しさの
みそへて
月
見
よ
と
ぞ
鳴く
虫の
声
々
権大納言
公
雄

新拾羇　む　ゝ　そ　ゝ　ゑ　ら　ゝ　ま　ゝ　平　行　氏
新拾羇　む　ゝ　を　ゝ　い　ゝ　さ　ゝ　そ　ゝ　ゝ　祝　下　高　也
同　ゆ　ゝ　ゝ　ゝ

風 若くれ うちつゝめる山のさま名ばかりなん
巻下 新なれば 雪しろ人まもてうちゆめよ行末の雪いかにとてゆりはりし
新拾 同 旧話 昭格院師
同 椋 こゝろおもてたゝせいねぬ日ふきて三尺余
冬 あをやぎ うちいでて水ぬるむ山風 飛おわらはれなん雪かりま 幸大納言
新拾 羇 あふさかの関もる人もうちとけて行かふ道の 為家
同 雑上 ひとりゐて月見るかたのかはらねば 権僧正
新千 神 神もしる 人のちぎりをかけてこそ思ひそめしか 頼基二位 為子
風 神 神もしる 人のちぎりをかけてこそ思ひそめしか 後光厳院 御製
新拾 恋四 うちとけて寝もせぬ夢の通ひ路は 伏見院 御歌
新続古 恋五 うちとけて寝もせぬ夢の通ひ路は 権中納言 公重

新千 哀傷 うけさらにうちつゝめるもの思ひの 法眼幻阿
新千 雑下 うちそむきて うちとけてのみ見し夜の 廿将内侍
新拾 雑下 ぬれぬれも うちとけてのみ見し夜の 常盤井入道 前太政大臣
夏 風 すゞしさは うちつゝめるもの思ひの 英大納言 為兼
風 巻中 雪ふる 九重の 頼康
新拾 恋二 九重の 後深草院 御百首
新拾 恋三 九重の 英大納言 為世
冬 風 雪ふる 九重の 後土御門 院
新続古 姫下 雪ふる 九重の 三条 西実隆
風 椋 雪ふる 九重の 宗祇
新拾 雑上 雪ふる 九重の 後柏原 院
風 恋三 雪ふる 九重の 後奈良 院
新拾 哀 水ぐきの 岡のやかたも うちつゝめる 後水尾 院

新千 哀傷 我身とは　大江千里
新後拾 雑上 もてなすと　仲平
新拾 哀 世中み　按察使道
新続古 弥 ふる川　坂上是則
新拾 雑中 うき身　法皇御製
同 恋五 ありし世と　菅原輔昭
同 恋三 そら地を　伊勢
新後拾 恋一 いつも世　元可法師
新後拾 恋四 くらす身　曽禰好忠

新続古 雑中 ふる神に　法橋昌昭
同 雑下 夏ふせて　大江千里
新続古 物名 ふるくなる　土御門院小宰相
新後拾 恋五 ふる雨　按察使院大納言典侍
新拾 雑下 ふる雪の　入道二品親王
同 恋五 ふるさと　為家卿
新千 恋四 ふるかりの　七条院小宰相
新千 恋四 ふるなみの　菅原為理
新後拾 哀傷 ふるさとの　伊勢
同 恋五 ふるさとを　後二条院宣旨
新千 恋四 ふるみちの　従二位雅有

新拾 春下 むらさき
新千 恋六 こころから
新千 恋六 ものそ
新千 恋六 おもふ
新千 恋六 なみた
新千 恋六 ひとり
新千 恋六 ねる
新千 恋六 ゆめ
新千 恋六 うつつ
新千 恋六 なから
新千 恋六 ふる
新千 恋六 ふり
新千 恋六 ふる
新千 恋六 ふる
新千 恋六 ふる

日
若と
抵
新上
新続古
処下
日
翼
新古拾
処下
矢
新千
恋五
新拾
恋又
日
恋又
新続古
新中
新千
処上
新拾
恋四
新続古
恋又

なく流れ　うらうらをまひるしひるよりもむしあまの釣舟
合ふる　うらうをれ松原は春吹くる所処のかすみ
吹とく　うらうとられ三笠山春の初ちどき漕ぐ跡
日　うらうら浦とをてつゝあら波のさはぐをみれば
翼　うらうらひかり渡るの上にてつゝ月をうとて
矢　うらうらとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋五　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新拾　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋又　何とゝも　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
日　今ゝきて　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋又　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新続古　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新中　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新千　あやう今乃　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
処上　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新拾　いふせん　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋四　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新続古　尺面も　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ

三位左衛　村か作和　同乃
抵中納言　義詮
新続古　家は親日　宮内
処下　寛司院　帥
日　酒酌入道　太政大臣
翼　洋心中　左衛督教定
新千　花若竹春　左近中将
矢　并中納言宣忠
恋五　同院按察卿　大納言

新千　旅こゝろ　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
冬　抵　君すらし　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋四　春はこゝ　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
日　処下　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新続古　七夕そ　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
処上　まれなる　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
日　恋又　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新拾　はてゝ　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋又　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
日　恋五　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
抵　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋二　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新続古　分につゝ　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋又　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
新千　吹凡乃　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋五　我ころ乃　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
抵　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ
恋三　うらうとうとうせわやきのふかまれかきみ

大江貞重　探金右衛
二条院讃岐　内侍
皇太后宮大夫俊成
伏見院御　中納言
為兼
土御門入道　前内大臣
後嵯峨院御製
従二位為子
後光厳院　前関白左大臣

日 永福門院
新後拾遺 惟宗孝言
日 寿暦法師
風 院御百首
新後拾遺 仏性法師
風 同
同 寿暦法師
新後拾遺 物上
日 永福門院
風 惟宗孝言
日 寿暦法師

新千 権中納言公明
新後拾遺 平貞秀
新後拾遺 中務卿宗尊親王
新後拾遺 二条院讃岐
新後拾遺 皇太后宮大夫俊成女
新千 寿暦法師
新後拾遺 伏見院御製
新後拾遺 三善為教
新後拾遺 越前守為盛
新後拾遺 前参議教長
新後拾遺 後京極摂政前太政大臣
新後拾遺 井中納言
新後拾遺 井中納言

新続古
於下

山ぢより
うつして社やこのわたん八をうつ玉の中に有て拙
うつして三つをまことにそこひいるかふのそれ仰
何ゆゑ
うつ月もまんみすしてもとの母
うつ三面ぜなるもつけもてあけわよそ契い
うつ玉くうの郭公
うれをこすやもしひて死ぬうまれかわり
二代まで
うもろく思ひとわふく八十九
うれてよりうまてはてたゝ我のこゝろ
うつ

新拾遺
雑上

月ごゝろ
うみの浦のもとまり月ぞ
うみのうちのみ
夜川ぢ
何ゝて
わすれ
我ゆえ
うつりゆ
思ひて

新拾
雑中

うつ世わよそ
うつりもはてゝ
うつ

新続古
雑中

うつ
うつ

新拾遺
雑中

うつ
うつ

新続古
雑中

うつ
うつ

新千
雑中

うつ
うつ

新千
雑中

うつ
うつ

新千

新千 釈上
新拾 雑中 風
雑下 風
雑下 新拾
新続古 恋四
新拾 雑上 風 恋七
新拾 恋一
同 恋五
新続古 恋五
新拾 恋二

新拾 雑下
新拾 釈中
同 恋三
新千 恋三
新続古 恋一
新千 釈中
新拾 恋六 風
新千 恋四
新拾 雑下
新千 釈下
新続古 恋五
新千 釈下

新千 基任
怪三位宗長
律師 尭孝
承福門院 四条
定家卿 三位知家
安嘉門院 四条
権大納言 公雄
権中納言 為相
中納言 為世
参大納言 為世
権大納言 実明
権大納言 為定
参大納言 為世
権大納言 隆朝
宣光門院 五条
参大納言 為世
伯民為教
大宰帥隆朝
藤原宇秀
大宰帥 家
三善為連
前大僧都 弁厳
遊覚門院 兵衛佐
参大納言 為定
参大納言 為世
前大僧正 尋尊

同 ありとい　　和泉式部
離別 ふことも　　従中納言
新勅古 こよひこ　　雅綱
巻三 ふくさに　　
新拾 世中の　　惟宗忠景
雑中 こゑくら
新続古 ○ほとゝ
巻三 ぎす
尺 なくこゑ
新続古 月影の　　
哀 ふけゆく
新後 花ゆゑ
哀傷 ものを
新中 ○ながめ
新拾 ながめ
新中 ふる
新後拾 もゝ
雑上 ちに
新後拾 ○ちり
雑上 ぬる
仍 ○花
巻四 ゆゑ
同 今日
雑下

新続古 ○月や　　後八条入道
雑上 ○ながめ　　前内大臣
同 ○ながめ　　前大納言
旅上 ○ながめ　　為定後改
仍 ○ながめ　　為定
新中 ○ながめ　　為定
新千 ○ながめ　　為定
巻一 ○ながめ　　
同 ○ながめ　　
新中 ○ながめ　　
新千 ○ながめ　　
同 ○ながめ　　
雑下 ○ながめ　　
新千 ○ながめ　　
同 ○ながめ　　
雑下 ○ながめ　　
新千 ○ながめ　　
同 ○ながめ　　
尺 ○ながめ　　
新後拾 ○ながめ　　
雑上 ○ながめ　　
新続古 ○ながめ　　
離 ○ながめ　　
新後拾 ○ながめ　　
新中 ○ながめ　　
仍 ○ながめ　　
新上 ○ながめ　　

新千 くらう
又 風 世乃中よ
新千 ほとゝぎす
又 風 世のさよ
新千 ゆふされ
又 風 世のさよ
新拾 これ人乃
又 新陵古 る哉山
新拾 なかめ乃
風 秋風よ
新拾 晴くもり
又 新陵古 世中よ
風 新拾 いもや
亜二 同 もろ人
亜四

新陵古 罪乃 ゆとの
同 又 水る乃
新拾 ゆふ秋
又 新陵古 いつもせん
亜二 新拾 なのよせん
亜四 同 とにさて
亜一 新千 もゝよ
亜三 新陵古 羽多
亜二 新千 年つゝ
亜五 風 萩乃
亜下 同 秋風よ
新千 今出て
亜四

新拾遺 恋二
新勅撰 恋三
新千載 恋三
新千載 恋三
新後拾遺 恋三
新後撰 恋三
新千載 恋三
新後拾遺 恋三
新後撰 恋三
新千載 恋三
新後拾遺 恋三
新後撰

風新下　今まても　しとなふらんうくさせよまて　兵大伴ノ旅人
新古拾遺上　世乃中ハ　うきてハ多くて　いつまても　ふるさとに　ふりゆくうくせて　芝原雑歌
新拾雑中　心とめ　しと思し　世中乃　いとまくさす　ハ石長岑
新古拾遺上　我やとに　ふりつもりぬる　ハ小野小町
風新下　ふるさとを　ふりやうもれぬ　秋風乃　ハ紀友則
新古拾秋上　秋風乃　吹ニ付てや　ふるさとに　ハ藤原敦忠
風雑中　ふるさとを　ふりやうもれぬ　秋風乃　ハ源宗于朝臣
新拾雑上　ふるさとを　ふりやうもれぬ　秋風乃　ハ藤原興風
新古遺雑下　ふるさとを　ふりやうもれぬ　秋風乃　ハ藤原興風

カ

新千夏　降てゝ　ハ土御門右大臣
新続古秋上　ハ源雅光
新千雑上　ハ花山院内大臣
新拾秋上　ふる雨ニ　ハ源師光
風雑下　ふる雨ニ　ハ源師光
新千雑上　ふる雨ニ　ハ源師光
新続古雑下　ふる雨ニ　ハ源師光
同夏　ふりそめて　ハ皇太后宮大夫俊成女
新拾春下　ふりそめて　ハ花山院内大臣
同春下　ふりそめて　ハ権大納言長雅
新古秋下　ふりそめて　ハ皇太后宮大夫俊成
新古春下　ふりそめて　ハ平宣基

新千
春下
せきとめて
新々
夏
心ろみよ
新拾
春下
つま
同
冬
くりもみ
新拾
雑処
大井川
新拾
別
ゐせきの水

十七首

新拾
春
同
処下
新拾
旅
新続古
処下
同
処上
同
秋上
同
冬
同
処上
新千
羇
新拾
雑
新千
雑中

送りせし
むまひもく
わし吹
野辺の雪
哉むもふ
ゐる
ゐかの
ゐる
野辺の雪
ゐる
野辺の雪
ゐる
野辺の雪

ゐてこそ見
今こそは
もてこし川
同夏
うつりゆく
位やは
そる秋
いでて
春くれの
吹むもふ

(秋)

(外)

(女)

(株)

(永)

(多)

(多)

(多

さりあえず　のちの次ぎてうひうひしくて　従二位為子
恋歌　　のちの百一首　　津守国基
ちる葉をも　いとふ風こそ　うらめしき　人に心の　なかりしものを
七十賀　　のちの百一首　　権中納言公重
あさけくも　ながめてすぎし　年月を　人の上とや　思ひ知るべき
同　　のちの百一首　　雅成親王
みるままに　うつろふ色の　ことの葉を　人の心の　秋にたとへて
恋歌　　のちの百一首　　平忠度朝臣
なれそめし　ころもの袖の　なみだ川　かはらぬ瀬にも　身をなげつべし
恋歌　　のちの百一首　　後鳥羽院宮内卿
のちまでと　ちぎりおきてし　ことの葉の　あだなる色に　なりぬべきかな
恋歌　　のちの百一首　　後鳥羽院
ながらへば　またこのごろや　しのばれむ　憂しと見し世ぞ　今は恋しき

ちぐさに　　のちの百一首　　前参議教長
色をそえ　　のちの百一首　　金吾院令旨
わすれ草　　のちの百一首　　前右大臣
せきもとめ　　のちの百一首　　権中納言為相
恋歌　　のちの百一首　　贈皇太后宮大夫俊成女
いけみずも　　のちの百一首　　今出川前右大臣
恋歌　　のちの百一首　　後山階院御製
ながめつる　　のちの百一首　　権中納言公重
秋歌　　のちの百一首　　贈左大臣
あだ人の　　のちの百一首　　権中納言基隆
わすれじと　　のちの百一首　　衣笠家内大臣
ながめつる　　のちの百一首　　法皇御製
色をそえて　　のちの百一首　　大江貞重

新拾遺 巻二 新千 巻二 新千 巻二 新千 巻三 新拾遺 巻二 新千 巻二 新千 巻三 新拾遺 巻二 新千 巻二 新千 巻三 新拾遺

訪濃吉 恋 訪拾 恋仲 訪千 天 同 天 訪濃吉 天 訪拾 天 訪千 天 訪松 天 訪濃吉 天 訪拾 天

恋ゝ人 のうしゐはせもてしものや牛ゝ人 送二位ゐ子
のうを山 のうまゐゝ人ゝ思ゐ ゝのまゐ ゝのまゐ 中納言家郷
恋ゆうき のつまゐゝうゝや竹の園ゝ ゝのまゐ 法ゐ栄連
ゝをゝく のつれゝり大ゐうしさ 二ゐ法記 寛喜
ゝたゝむう のつゐうゝ一のゐまうゐ ゝ梢のゐゝ 前大納言 乃世
ゝのつれ ゝのまゐ ゝのまゐ 非成仏弁
人ゝに のつれるゐ ゝ思ゐ 侯人ゝ
ゝのつゐ ゝのまゐ ゝのまゐ 前大納言 受 四
ゝれうゝ れゐのゝゐ ゝのまゐ 前大納言 定良
ゝのうゝ のうれゐうゝ ゝのまゐ 権法性寺 道 前宮内卿 基良 左衛門
ゝうゝ乱ゐ のうれ水ゐうゝ ゝのまゐ 三位季俊
ゝうゝ乱ゐ ゝうれゐ ゝのまゐ 二ゐ定親 卿
ゝうゝ乱ゐ ゝうれゐ ゝのまゐ 二ゐ定親 卿

訪千 天 訪濃吉 天 訪拾 天 訪千 恋 訪 天 訪 天 訪 天 訪千 天 訪 天 訪 天 訪

新拾 恵三 新古 雑始 同 冬 同 地上 新千 恵六 新古 恵四 新後 恋下 新古 恋下

帰る雁行き
なやらひて
雲くらし
さえてう
昔みし
思およ
こころさ
いうて
なみやさ
ぬるまで
みんな
今そて

耶中 耶中 耶中 耶中 耶中 耶中 耶中 耶中 耶中 耶中

北の空
のそらや
のそらも
のそらみ
のそらに
のそらに
のそらみ
のそらな
のそらの

原言秀 前大僧正 従二位為子 前大僧正 従二位氏久 従二位為子 前大僧正 従二位為子 前大僧正 従二位為子

新千 雑中 新古 恵五 同 恵三 新古 恵四 新後 恋上 新千 雑中 新古 恵六 新拾 恵三

同 雑上 新古 冬 新古 冬 同 恵四 新千 冬 新古 恵三 新古 恵四 新後 恋上 新千 雑中 新古 恵六 新拾 恵三

ものそう
わさらや
のそとみ
面影も
ものう
ねるをり
宿をくて
面けい
のそうさ
ものうち
のそうさ
のそうち
のそうち

原言秀 前大僧正 従二位為子 前大僧正 従二位氏久 従二位為子 前大僧正 従二位為子 前大僧正 従二位為子

新千 冬 あされく
新後拾 冬 月も
夏 風
雨上 新後拾 冬 わりの
冬 新拾 もく雪
風 冬 こもりき
新後拾 雨上 よをぬく
風 新後拾 雨下 きぬるう
新後拾 雨上 ゆきて
新後拾 羇 のてく
新後拾 雨下 ちきり

のこりの
のこる春郡
のうみさり
元いまゝ
わりの
もく雪
こもりき
よをぬく
きぬるう
のてく
ゆきて
ちきり

内大臣 雨下
権大納言 冬
明通法師
上郎兼教 冬
原直頼
前大納言 冬
原孔雀 羇
前大納言 雨
原実氏 冬
津守国冬 雨
前大僧正 雨
永陽門院 雨
皇太后宮大夫 雨
大夫俊成 雨

新千 春上 ゆきて
新拾 春上 風
新後拾 春上 羽打
新後拾 春上 雨
雨 春上 新
新後拾 春上 冬
風 春上 新
雨 春上 新
新後拾 春中 春
雨 春下 ゆ

ゆきて
風
羽打
雨
新
冬
風
新
雨
ゆ

前権僧正 雨
参議雅経 春上
参議雅経 春上
前大僧正 雨
参議雅経 春上
前大僧正 雨
前大僧正 雨
前大僧正 雨

動花もと　なされ　　なされ梅よりて　　休又院出家
新千　　　

月 ここちよう のされまし風なの也ゆふぐれ月やよう
如中 新は於 ゐよもり 女 風 まし中 月 女 新陵古 女 月 新下 新拾 冬 風 女 月 冬 新陵古 女 新は於 ゐ上 新於 部上
如伏之院 口ノ可
ね宇治院 作製
ゐ二位詮
坂京極殿 景太政大臣
坂京極殿 景太政大臣 内大臣
ゐ二位詮
進子内親王 家百日
院冷泉 の更
左京大夫 顕輔
中務卿宮 親王
作製
ゐ二位家隆

百九十七首

新千 冬 新陵古 みよし野 冬 風 女 新千 恋三 日 恋二 新陵古 署 新千 恋三 日 恋二 新陵古 署
ゐ中 ここちよう のされまし風なの也ゆふぐれ月やよう
ゐ中 ここちよう のされまし風なの也ゆふぐれ月やよう

新和歌類句集

む

新千五二 同 まとじ

むめの花 (雪蔵法師)

風雅 雑中

新千秋上

新後冬

新拾五一

新続古今下 風五二

新拾物名 同 五四

新拾
夏

橘の神うはこうり
むら
新千
恋五
ながめやるかげもみなせ川
むら
同
恋
なかめつつ思ふ心のうちをこそ
むら
新拾
雑中
いかにせんこひしきことのやまざれば
むら
新千
神
ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
むら
新拾
夏
ほととぎすいかなるかたち
むら
新千
雑下
ほととぎすいかなるかたち
むら
風
雑下
ほととぎすいかなるかたち
むら
新続古
冬
ほととぎすいかなるかたち
むら
新千
神
ほととぎすいかなるかたち
むら
新拾
夏
ほととぎすいかなるかたち
むら
新千
恋五
ほととぎすいかなるかたち
むら
同
恋
ほととぎすいかなるかたち
むら
新拾
雑中
ほととぎすいかなるかたち
むら
新拾
恋五
ほととぎすいかなるかたち
むら
新続古
雑上
ほととぎすいかなるかたち
むら
新千
雑下
ほととぎすいかなるかたち
むら
新続古
哀
ほととぎすいかなるかたち
むら
新拾
雑下
ほととぎすいかなるかたち
むら
新千
冬
ほととぎすいかなるかたち
むら
新拾
夏
ほととぎすいかなるかたち
むら
風
雑下
ほととぎすいかなるかたち
むら

後深心院
御製
権大納言
宗綱
後深草院
少将内侍
入道二品親王
道助
後堀河院
御製
雅成親王
権中納言
定家
後堀河院
御製
権中納言
雅

新拾 雑上
風
冬

新拾
冬

風
雑中

新拾
雑上

新拾
冬

風
冬

新千
雑上

新続古
巻下

風
巻上

新千
巻下

同
夏

新千
雑上

新続古
巻下

風
冬

新千
雑上

新続古
巻下

同
冬

新拾
雑上

風
夏

新拾
雑上

風
夏

同
冬

新拾
雑上

風
夏

新拾
雑上

風
夏

同
冬

新続古
巻三

新千
夏

同
雑下

風
夏

同
冬

新続古
巻一

新拾
雑上

新拾
雑上

風
夏

新続古
巻下

新拾
雑上

風
夏

同
冬

新拾
雑上

風
夏

新続古今上　神なびの山のもみぢ葉ちりつもる冬の日数も
風冬　山のふもとも雪ふかし
同冬　神無月しぐれてのちに三日月の
新拾遺冬下　かげさへ見えてもる木の葉に
新千載冬上　ほのぼのあけぬ
風雑中　ふるさとの
新拾遺冬　ながめやる
新千載上　一夜ねし
風雑中　ふるさとの
新拾遺雑秋　ながめやる
新拾遺雑中　ふるさとの

新千載三　ねもおとろかぬ
新拾遺二　世々ふけて我さへつもる
風三　ふるさとあれて
新千載　ふるさとの
新拾遺　ふるさとの
新千載　ふるさとの
新拾遺冬　ながめやる
風二　ふるさとの
新千載　ふるさとの
新拾遺雑秋　ふるさとの

第六帖之後　神なびの山のもみぢ葉ちりつもる冬の日数も
進子内親王　山のふもとも雪ふかし
第六帖之後　神無月しぐれてのちに三日月の
第六帖之後　かげさへ見えてもる木の葉に
金葉二度　ほのぼのあけぬ
後拾遺　ふるさとの
第四度之家　ながめやる
後拾遺　一夜ねし
後拾遺　ふるさとの
深草院　ながめやる
第六帖之後　ふるさとの
第四度之家　ながめやる
後拾遺　ふるさとの
三善為信　ながめやる

新千載三　ねもおとろかぬ
新拾遺二　世々ふけて我さへつもる
風三　ふるさとあれて
新千載　ふるさとの
新拾遺　ふるさとの
新千載　ふるさとの
新拾遺冬　ながめやる
風二　ふるさとの
新千載　ふるさとの
新拾遺雑秋　ふるさとの

第六帖之後　ねもおとろかぬ
寺特院　世々ふけて我さへつもる
第四度之家　ふるさとあれて
後拾遺　ふるさとの
永福門　ながめやる
第六帖之後　ふるさとの
後京極　ながめやる

新千尺　めぐりあふ月はかりの行末をうるみて我と袖けさ
新後拾遺　なれや寺秋は初ゑをらしのまはなきこころ
新千秋下　風秋中　ふきこえよ
新拾遺上　そらたえぬ名こそ
新千首三　おもひ川みをもにうる
新後拾遺首五　わすれとはいまは歌あ
風雅下　人こそしらぬ月
新拾遺雑中　ひとりねのうへはそ
新千首二　夜もすがらいつかは
新後拾遺冬　氷こそ
同尺　いかにあさくて袖の
新後拾遺雑上　秋の田のかりそめふしに逢に
同雑上　聖人の父にあてゝ歌
風雑　をとゝ哀にいとほしく逢
新後拾遺冬　むもとにみよしの清宮上人
同　霜
風　枝
新千雑上　まつのあさみ猿の枕よ
新拾雑　いはろはをとる
新千誹諧歌　ふりぬるやそれ
新拾首二　うつせみは浮世の夢や
風　冥　添ふとなき身は
月夜ありしの水を
三代のなるふるいもの
なくみやものうに
おとゝをえそいまの

新千尺　めぐりあふ月はかりの行末をうるみて我と袖けさ
新後拾遺　なれや寺秋は初ゑをらしのまはなきこころ
新千秋下　風秋中　ふきこえよ
新拾遺上　そらたえぬ名こそ
新千首三　おもひ川みをもにうる
新後拾遺首五　わすれとはいまは歌あ
風雅下　人こそしらぬ月
新拾遺雑中　ひとりねのうへはそ
新千首二　夜もすがらいつかは
新後拾遺冬　氷こそ
同尺　いかにあさくて袖の

法皇ノ製哀
後深草院等
四首
大江三秀
第九ノ九
平常頭
第六ノ四
為氏
金葉第六改
第九
平兼盛
墨後
恵慶法師
拾遺雑秋
第六ノ四改
第六ノ五改

新千雑上　聖人の父にあてゝ歌
風雑　をとゝ哀にいとほしく逢に
新後拾遺冬　むもとにみよしの清宮上人
同　霜
風　枝
新千誹諧歌　ふりぬるやそれ
新拾首二　うつせみは浮世の夢や
風　冥　添ふとなき身は
月夜ありしの水を
三代のなるふるいもの
なくみやものうに
おとゝをえそいまの

新千雑上　秋の田のかりそめふしに逢に
新後拾遺冬　むもとにみよしの清宮上人
同　霜
風　枝
新千誹諧歌　ふりぬるやそれ
新拾首二　うつせみは浮世の夢や
風　冥　添ふとなき身は
月夜ありしの水を
三代のなるふるいもの
なくみやものうに
おとゝをえそいまの

第九ノ九
平兼盛
墨後
恵慶法師
拾遺雑秋
第六ノ四改
第六ノ五改
校大納言資
康
後深草院等
四首
大江三秀
第九ノ九
平常頭
第六ノ四
為氏
金葉第六改
第九
平兼盛
墨後
恵慶法師
拾遺雑秋
第六ノ四改
第六ノ五改
校大納言資
康
後深草院等
四首
大江三秀
第九ノ九
平常頭
第六ノ四
為氏
金葉第六改
第九
平兼盛
墨後
恵慶法師
拾遺雑秋
第六ノ四改
第六ノ五改

ゐ

永福門院
百三十三首

風 巻一 新撰古 新上 新千 巻二 同 秋下 新拾 秋下 新千 秋下 同 冬 新拾 冬 新千 巻二 同 秋下 同 夏 新拾 秋下 新続古 巻一

うちよりて君が命とてきりぬれば　第大納言資明
女郎花しをるるほどに成にけり　後京極摂政
たちのぼりつつ雲となるらん　藤原道経
さとりへだてぬ月を見るかな　源空上人
浪の上に月をながめて夜もすがら　源頼之朝臣
波ものどかに千るの入かな　参議雅経
長夜もすがら月をながめて　後鳥羽院
ふるさとの秋の夕べを思ひやる　藤原秀能
風ぞ身にしむ荻の上葉に　後京極摂政
うちそよぎてもとふ人ぞなき　津守国冬
ふるさとの荻の上風吹くからに　後二条院
思ひ出でいふ事ぞなき　延政門院
うちつけにやは秋の来ぬらん　万秋門院
おもひ入る山の端の月をのみ　後京極摂政
うちながめつつ明しつるかな　後二条院

風 巻上 新千 巻上 新拾 冬 新続古 新上 新拾 秋下 同 秋下 新拾 冬 新拾 夏 同 秋上 風 巻上 新千 秋上 同 秋上 風 巻上 新続古 巻下

ふきそむるよりぞ秋とは　人丸
冬ながらかすみこめたる　藤原為家
ふれはうき身をしる袖の　後鳥羽院
河きしよりぞ水はこほれる　後京極摂政
久方の月の桂も秋はなほ　第大納言為定
月影ふけて人ぞ待ちける　後二条院
ながめやるをちの里人　藤原為家
たちなれし衣手涼し　後京極摂政
うちなびきたる青柳の糸　第大納言為氏
たちかへりまたうちなびく　藤原為家
ながめつる夕べの雨に　後京極摂政
うちなびきたる青柳の糸　第大納言為氏
たちなれし衣手涼し　後京極摂政
うちなびきたる青柳の糸　第大納言為氏

新拾遺 哀三上
同 哀三上
新拾遺 哀上
新續古 哀上
新拾遺 冬
新續古 冬
風 雜中
新拾遺 哀上
新千 哀二
同 秋上
同 秋下
風 哀四

宮ノ人へなどいひやりたるに
うちしぐれてふるもふりぬる庭
うちしぐれていたう色もまさらぬ
哀もとふかれぬるをりをり
うちそやきこえしも月とさしぬ
うちふりぬるをりをりに
神な月あさ日のかげ
うちふりぬるやうにて
ふりぬるやうにて
あるかなきかの
うちふりぬるやうにて
都なるものとてしらぬ
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて

常盤井入内
有文改大化
源重氏
新後撰冬
源基之
橘俊綱朝臣
等和元始
左大弁
兼好法師
中文章博
三女
慶運朝臣
永福門院
右衛門督

新續古 哀五
新千 哀下
新拾遺 哀上
新拾遺 哀五
同 離
風 哀六
風 秋上
新千 哀二
新拾遺 哀五
風 尺
新千 冬
同 哀五

うちふりぬるおなじ恨みの
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて
うちふりぬるやうにて

兼好法師歌
人日庚申
前中納言
信実朝臣
藤原宗秀
祝言
源基氏
後光厳院
示談上人
後光厳院
祝言成画

新千 夏
新拾 雑賀
同 雑上
新続古 雑下
風 雑下
新続古 三
風 夏
新拾 夏
新続古 二
新千 古二
新続 雑体
新拾 賀

新千 冬
風 雑下
新千 雑上
風 雑下
同 雑中
新続 雑体下
風 古五
同 古三
新続古 天
新千 雑中
風 雑上
同 雑中

新拾 雑下
新後拾 雑下
新後拾 雑上
新拾 離上
同 雑中
同 雑上
同 恋四
新拾 離上
同 雑上
同 恋五
同 雑下

三つこくの一夜なりけん　枕草子 賀茂
うつりゆくみやこをいでてみむとてもとりもあへぬ心ちこそすれ　新後拾 雑下
初かりにとて三つ子の
うつろいやすき秋の日数をかぞへてよ　新後拾 雑上
うつろひてのちの心の花なれや　新拾 離上
うつろひてもとの心の変らずは　同 雑上
うつろひて本おもはずは　同 雑上
うつろひてもとの心の変らずは　同 恋四
うつろひて本おもはずは　新拾 離上
うつろひやすき秋の月かな　同 雑上
うつろひやすき秋の月かな　同 恋五
うつろひやすき秋の月かな　同 雑下

うつろふもかなしかるべき花の色を　新拾 離下
いかばかりうつろひぬらん神無月　新後拾 恋四
うつろひもせぬ常磐木の
三笠山うつろひにけり春日野の　同 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　同 雑下
うつろひにけり春日野の　新拾 雑下
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑下

うつろふもかなしかるべき花の色を　新拾 離下
いかばかりうつろひぬらん神無月　新後拾 恋四
うつろひもせぬ常磐木の
三笠山うつろひにけり春日野の　同 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　同 雑下
うつろひにけり春日野の　新拾 雑下
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑下

うつろふもかなしかるべき花の色を　新拾 離下
いかばかりうつろひぬらん神無月　新後拾 恋四
うつろひもせぬ常磐木の
三笠山うつろひにけり春日野の　同 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　同 雑下
うつろひにけり春日野の　新拾 雑下
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑下

うつろふもかなしかるべき花の色を　新拾 離下
いかばかりうつろひぬらん神無月　新後拾 恋四
うつろひもせぬ常磐木の
三笠山うつろひにけり春日野の　同 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　同 雑下
うつろひにけり春日野の　新拾 雑下
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新拾 雑上
うつろひにけり春日野の　新後拾 雑下

彰古本下
えこいでのうれしさをうたへるうた
彰拾五
をの松もあはれさそへてをちかたの
風
雑中
いでてそもとこうたにそうつるまてをしるしなる松風の大
彰古本四
うつるそのうつりの秋をもみる
風
三
面白かりけるうたみの
彰古本三
うれ秋のつきにかはをうつしてそ
彰拾四
うつるそのうつりの秋をもみる
彰於雑下
うつるそのうつりの秋をもみる
彰古本
天
うつるそ袖にそまれる白露
風
雑下
かなうちにみちくるかけ
彰古本
袋
うつるそ袖にそまれる白露
同
脇
ことにつみちくるかけ

彰後拾
板
さとをてなまくるふ
同
雑下
かり衣こうさとをへ乃
彰古本
文
もちうて中ふゆ
風
雑上
いにもんしのたてなり
同
五
なとなくそれろそ秋
彰拾
雑下
ひのよ新のすこ成
同
雑上
女郎気ろいを袖よ
風
天
いうへのみのれをそ
彰拾
賀
君代ぐくをけ
彰千
五
いのそも面影そり
風
天
そのまに流のをを
彰拾
雑上
妹乃月むをいは

彰古本
板
秋流製
彰拾
五
菊中納言
風
雑中
秋風の大
彰古本
四
菊大納言
風
三
面白かりけるうたみの
彰古本
三
菊中納言
彰拾
四
平貞国
彰於
雑下
菊大納言
彰古本
天
菊中納言
風
雑下
秋風の大
彰古本
袋
菊大納言
同
脇
菊

彰後拾
板
さとをてなまくるふ
同
雑下
かり衣こうさとをへ乃
彰古本
文
もちうて中ふゆ
風
雑上
いにもんしのたてなり
同
五
なとなくそれろそ秋
彰拾
雑下
ひのよ新のすこ成
同
雑上
女郎気ろいを袖よ
風
天
いうへのみのれをそ
彰拾
賀
君代ぐくをけ
彰千
五
いのそも面影そり
風
天
そのまに流のをを
彰拾
雑上
妹乃月むをいは

覚尋法師
神祇伯顕仲
権中納言通
後拾遺
後二条
清性入道
関白左大臣
後拾遺
後拾遺
後拾遺

新千 新上
同 秋
風 妹下
新拾 新上
新千 冬上
新続古 冬下
新拾 冬上
新千 冬上
新拾 春上
新続古 妹上
同 新妹
新続古 妹上

まさしの花よりもうつ
うつきてとて、きあう男とみけ
あまたの人あまつ
うつきて秋代よりてあくらし
大井川おとみちを
うつてわすれ多井九段て立
夜ふけ人しれぬ香とに
うたれて花よりもみうよ
うたはれくるの九休みの花
うたはれくるの九休みの花
うたれて春のあけぼの
うつれて春ふくる
うつれて中くもの対面
うつれて花のうつろひ
うつれて春ふくる
うつれて春ふくる
うつれて春ふくる

新続古 冬
春雨にしをれもあへぬ
うつもれて埴生の小屋の
新拾遺 恋四
うき出やいつ逢なこそ
うつせ貝ふれても袖に
新古 夏
夏衣うすくもあれや
うつせみのうつりかはれる
新拾遺 恋六
ふるさとの月にのこせる
うつせみのむかしを袖に
新続古 雑上
我ながらなほうき身
うつせみのうつりもはてぬ
同 雑中
夢のうちにおもふ事
うつせみの空蟬の世と
新拾遺 恋三
いつも松いくよの世
うつせみの名をとめかうし
新千 雑上
なにはえて井手の
うつせみの人めをしげみ
新千 夏
見えそめし
うつせみの神
同 雑下
なにしおはゞ
うつせみの名
新続古 冬
春雨にしをれもあへぬ
うつもれて埴生の小屋の
新拾遺 恋四
うき出やいつ逢なこそ
うつせ貝ふれても袖に
新古 夏
夏衣うすくもあれや
うつせみのうつりかはれる
新拾遺 恋六
ふるさとの月にのこせる
うつせみのむかしを袖に
新続古 雑上
我ながらなほうき身
うつせみのうつりもはてぬ
同 雑中
夢のうちにおもふ事
うつせみの空蟬の世と
新拾遺 恋三
いつも松いくよの世
うつせみの名をとめかうし
新千 雑上
なにはえて井手の
うつせみの人めをしげみ
新千 夏
見えそめし
うつせみの神
同 雑下
なにしおはゞ
うつせみの名

新千 冬
いつをかぎりの
うつせみの
新拾遺 雑体
うつせみの
新続古 冬
君が代よりもむしろこそ
うつせみのつゝみもあへぬ
新千 冬
風
雑上
作りおきて
うつせみの
同
雑中
津の国の難波のさとの
うつせみの
新拾遺 恋一
みるかりのわれもこそ
うつせみの
新拾遺 秋下
むしの音も
うつせみの
新続古 雑上
嵐のみ
うつせみの
同
雑上
雲にまがふ
うつせみの
風
雑上
聖のみかりころも
うつせみの

源家氏
小槻匡遠
法印
行意
菅大僧正道
意
前中納言有忠
光明峯寺入道
前関白太政大臣
藤原秀茂
前参議資
従二位家隆
権大納言義詮
入道
前太政大臣
藤原基嗣
公
左近将監
源清氏
法印
行意
菅大僧正道
意
前中納言有忠
光明峯寺入道
前関白太政大臣
藤原秀茂
前参議資
従二位家隆
権大納言義詮
入道
前太政大臣
藤原基嗣
公
左近将監
源清氏

春雨雅永朝
臣
永空法印
同
前の関白太政大臣
素性法師
拾遺房
定頼法師
前中納言
権中納言匡房
後冷泉院御製
後冷泉院
御製
後円光院関白左大臣
後宇多院御製
後宇多院
御製
権中納言匡房
後円光院関白左大臣
後宇多院御製
後宇多院
御製

新拾 雑下
新続古 冬
同 雑上
新続 雑上
新続古 雑下
新千 恋二
新拾 冬
新続古 羇旅
新拾 羇旅
新千 秋上
新拾 雑上
新続拾 冬

新勅撰集 巻第六 冬歌 二百九十五 後嵯峨院御製

ふる雪に入江のちどりなくこゑの
うら風よさえまさるなり

二百九十六

藻塩やく煙もそらの
うら風よさそふ冬の夜半かな

二百九十七

題しらず

月前雪

雪ふかき庭の松原ふみわけて
月見る君もとふ人もなし

二百九十八

いまもしも松のとぼそをさしこめて
うら風よわる雪の夕暮

二百九十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百

立ち別れ君がたもとやこほるらん
うら風のぬかるまでさゆる夜半に

三百一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二

題しらず

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百二十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百三十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百四十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百五十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百六十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百七十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百八十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

三百九十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百二十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百三十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百四十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百五十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百六十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百七十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百八十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

四百九十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百二十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百三十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百四十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百五十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百六十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百七十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百八十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

五百九十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百二十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百三十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百四十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百五十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百六十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百七十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百八十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

六百九十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百十九

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十一

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十二

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十三

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十四

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十五

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十六

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十七

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕暮の空

七百二十八

雪ふかき山のかけはしうちわたし
うら風よわる夕

新千 秋下
新拾 秋上
新秋 秋上
新続古 春上
新続後 春上
風 三四
新千 秋下
新拾 三四
風 三二
新千 春下
新拾 三四
新秋 三四
新千 三四
風 三四
新秋 神祇
新千 春上
新拾 三四

出る秋も霧なれやうちに
きてもとまれる雲やなる
ぬるこの節のしもや
くもれる夜半の月
くれて四方の里に
うさいて秋をやそこの月
後二条為子
永福門院
源氏
紀伊長

新千 秋下
新拾 秋上
新秋 秋上
新続古 春上
新続後 春上
風 三四
新千 三四
風 三四
新秋 神祇
新千 三四
新拾 三四
風 三四
新千 秋下
新拾 三四
風 三二
新千 春下
新秋 三四
新千 三四
風 三四
新秋 三四
新千 三四
風 三四

うちもとまれる雲やなる
きてもとまれる雲やなる
ぬるこの節のしもや
くもれる夜半の月
くれて四方の里に
うさいて秋をやそこの月
後二条為子
永福門院
源氏
紀伊長
うちもとまれる雲やなる
きてもとまれる雲やなる
ぬるこの節のしもや
くもれる夜半の月
くれて四方の里に
うさいて秋をやそこの月
後二条為子
永福門院
源氏
紀伊長
うちもとまれる雲やなる
きてもとまれる雲やなる
ぬるこの節のしもや
くもれる夜半の月
くれて四方の里に
うさいて秋をやそこの月
後二条為子
永福門院
源氏
紀伊長
うちもとまれる雲やなる
きてもとまれる雲やなる
ぬるこの節のしもや
くもれる夜半の月
くれて四方の里に
うさいて秋をやそこの月
後二条為子
永福門院
源氏
紀伊長

新續古今下
新千載卷五
同
卷二
新續古今五
同
卷
同
新拾遺卷三
新續古今五
同
今下
新千載卷六
同
卷
新拾遺卷

いくそ千世のふるころもれ玉て君
ふるもちんあこそ浦風
みてもるものなれいくるる秋
いるこいとのうら松
うみてもてれるこ文よこうそへまる
凡くなおそうる宿
うみてもつきをいくとうる
うみてもれけのかく
うみてもそうこれ玉
いふもうん我世なき野の
うみてもそふけるあるあと
うみてもすうれるん
あまのとむさの玉を
うみてもそうる
分きてうる
うみてもそうる
玉川のさとのこ称乃
神かうつてうれ

新續古今
同
新千載卷
同
新拾遺卷
新千載卷
同
新拾遺卷
新千載卷
同
新拾遺卷
新千載卷
同
新拾遺卷
新千載卷
同
新拾遺卷

新ちをうる玉
谷をいてうるもの
花さうあうれるの山乃
うれ井れ物うえて
時一あれ谷うかいつる
立人る古代乃まるも
うれるの乳なる称れけるん
ほれくやりて
あさるくるのれるて
花まて有りむ物そ
うれるのうれみおりいかわ
うれるのくるもれ谷乃玉て
うれるのなみ花ようるさてみれ
うれるのなしれ乳てみるん

奈良朝花流茶
明白内大
東大仮文
安後撰
大中大納言
勿大
原後乳物大
拾遺多流
小倉衣
拾宇多院
宇和無侍
読人不知
茶大納言為氏
通国法師
拾二位乳母
後照念院関
白左大
源高秀

新千 巻四
新拾 巻一
風 巻上
新続古 巻二
新拾 巻上
新千 巻四
風 巻上
新拾 巻上
風 巻上
新続古 巻上
風 新拾 新古

小倉令嬢
源重氏朝臣
後拾遺門院
選子内親王
皇太后宮
更級日記
天暦の御製
常光院
後三位中将
紀貫之
大納言公任
源宗于朝臣
後拾遺門院
覚源法師

新千 巻一
新続古 巻二
風 尺
新千 尺
新拾 雑上
新千 巻一
風 巻三
新拾 雑上
新千 雑中
同 巻四
同 雑下
同 雑下

等持院贈左大臣
陽明門院
後京極摂政前太政大臣
後光明照院
前関白左大臣
後拾遺作者
前大僧正行尊
後拾遺作者
前権僧正永縁
後拾遺作者
前権僧正永縁
後拾遺作者

風 五
風 五
新拾 雑中
風 部下
新千 秋
新拾 五
新拾 三
新千 五
同 五
新拾 四
新一 雑上
新続古 五
新拾 一
新拾 雑中
新千 雑上
新続古 五
新拾 四
新千 五
新続古 四
新拾 冬
新千 五
新続古 二
新拾 雑秋
新拾 雑秋
新拾 雑下
風 冬
新続古 天

いふをもわれもわれもとそうちむれ
いふをもわれしなりとも
なきいつ松をもろこしの
なふ秋あやめもわかぬまに
まちわたりこし世にたえて
この葉ちるさに妹風そふく
夜とこのくいろく別れ
うれたきたにしてまた
かなしの方とうれたまれ
ものもそよふれ袂さえ
水のとにれしものを
ものうてふあるはなきの
うれ中ぬるしうあるれ

承徳二年内大臣殿
歌合 肥後

後二位宰相

権大僧都隆縁

藤原家長朝臣

隆信朝臣

後二位宰相

右京権大夫
定家

後二位宰相

民部卿家顕

深き法花を
うれみてとなにとこれ世乃中
旨経
うれ名わ世にくもれ波乃
慈恩寺南院
前九十首
うれ笹の池乃ねうれみのしみわ
伊勢
うれまれ秋もこゝろなくて
うれまれ松をしふ秋ま
うれまうれ神れわ時雨もも
うれ我てそれ時雨なれも
うれ中にもあそ秋風そ吹
うれまにもあそ秋下葉
うれまに木葉吹ちらし
うれまにたゝ立乃
後二位宰相

寺精進院
前九十首

おわれ院
前九十首

権大納言為家

大弐三位有家

後京極摂政
前太政大臣

新拾遺冬　風をねぐらにあつまりゐて物ごとに
風冬　ねりもてゆく時雨哉
新拾遺冬　吹とゝのほりて一力雲
新拾遺雑四　吹風まぢりにこゑて川
新千載雑上　月きよみさてもうく
新拾遺冬　吹とゝる風ありて
新拾遺雑上　山ふところの月なるに
新拾遺冬　風ありさへいとゞやあら
新拾遺雑上　いよもしもとゞろきこゆる
同　都にてそれよりふく
新千載冬　いく月かたてやとゞめ
新拾遺冬　吹ほこりれてふく

新拾遺古　そよぐなゝ多くのうら
同　風
新千載哀傷　うりこみ林よりえをゝ
新拾遺雑上　吹よりうちしおれて
新拾遺雑上　ほそりて月しかまき
新拾遺雑上　ふたゝびとはいこもり
新拾遺雑上　あるれもしやあはれ
新拾遺雑上　衣うつ声にさりけり
新拾遺雑上　さまざまにうれのみ乃
新拾遺雑上　風
新拾遺雑下　ゆきふる郷にきゝなれ
新拾遺雑下　うれ秋更ゆく夜ゝそ
新拾遺雑下　うれぬしにさのあるにも
新拾遺雑下　うれぬしにてやこの月に
新拾遺雑下　うれ事ゝ人おもひいるる

新拾遺冬　風をねぐらにあつまりゐて物ごとに　藤大納言
風冬　ねりもてゆく時雨哉　後二条院御
新拾遺冬　吹とゝのほりて一力雲　藤大納言
新拾遺雑四　吹風まぢりにこゑて川　宮内卿
新千載雑上　月きよみさてもうく　従四位
新拾遺冬　吹とゝる風ありて　藤原為
新拾遺雑上　山ふところの月なるに　為
新拾遺冬　風ありさへいとゞやあら　藤原為
新拾遺雑上　いよもしもとゞろきこゆる　従四位
同　都にてそれよりふく　為
新千載冬　いく月かたてやとゞめ　為
新拾遺冬　吹ほこりれてふく　藤大納言

新拾遺古　そよぐなゝ多くのうら　権大納言
同　風　為
新千載哀傷　うりこみ林よりえをゝ　源満祐
新拾遺雑上　吹よりうちしおれて　遠島に
新拾遺雑上　ほそりて月しかまき　中納言
新拾遺雑上　ふたゝびとはいこもり　源経氏
新拾遺雑上　あるれもしやあはれ　従二位
新拾遺雑上　衣うつ声にさりけり　冷泉
新拾遺雑上　さまざまにうれのみ乃　従下三位
新拾遺雑上　風　三位
新拾遺雑下　ゆきふる郷にきゝなれ　院御
新拾遺雑下　うれぬしにてやこの月に　養源院
新拾遺雑下　うれ事ゝ人おもひいるる　小町

新千 雑中
新続古 巻一
同
尺
同
巻二
新拾
巻一
風
雑下
新千 雑中
新拾
巻二
新続
巻上
新拾
雑中
同
巻三
風

教なる方にてなけれ　源重頼
せんなきへの神もわおもふ　新続古巻一
むらくいはる男とよ　同尺
行なやのるをれと　同巻二
うたとのありしよも　新拾巻一
うたとの袂そもしろたへ　風雑下
れ袂にめれはうらみは世をも　新千雑中
うれみるのをきことと　新拾巻二
うれ方をいとふしにうそ　新続巻上
うれ方をそそ　新拾雑中
うれ方をそそ　同巻三
うれ方をそそ　風

新千 雑中
新千 巻一二
新拾 夏
新千 巻一三
新拾 巻八
同 巻三
同 巻四
新続古 巻二
新拾 巻三
新拾 巻四
同 巻二

うれつゝ暁やのもくそれ
行道法乃ものの為縄
うれ三法にもとみに
うれつゝまれの有為
うれ世のむなしき
うれ我もいなけて
うれ乃そむなせ
うれ乃我おもひけ
うれ人乃なにいう
うれ人乃ありとうに
うれ人乃ありやいの
うれ人乃ありとうに
うれ人乃ありとうに
うれ人乃ありとうに

後京極殿
今者
大臣

後京極殿
大臣

後京極殿
大臣

後京極殿

新拾一　ゆく秋のこころやめてうつせみの

新後二三　うきよをそむくにつけてなほ

同三　うきものは

風四　うきものはうきものとのみ

新拾一　人うらめしくおもふにも

新拾雑下　本おもふにもうらめしく

新後古四　なのみの川のうきせをも

風雑中　なのみかは那波の宮

新後古雑上　ぬれぎぬとなほうらむらん

新拾雑中　我ぬれぎぬやうきものは

新後古五　かくやとなほうらむらん

風雑下　いつに思いのうらむらん

新拾二　心姫乃ものみおもふそ

雑四下　雑四しるらんそてのうへの

新拾雑下　夕日寺扇のみとりより

風雑中　うつろふ時の秋の風

同雑中　乃なかめ暮ぬる秋の月

同雑中　ふるさとの秋の月

同冬　ふるえもなぬる川のうへ

新後古四　おもひ川なみのうちとけよ

同三二　うちとけよ谷風のうちとけよ

新拾雑雑　さくらふもあやうし淵のうき

新後古三三　うしき乃神ゆく水の

風雑上　元なくおくる四年の

新後古雑下　時雨ぬくもの花のうつろひて

深三郎有教　深三郎有教

順徳院御製　順徳院御製

徽安門院一条　徽安門院一条

永福門院内侍　永福門院内侍

後京極摂政　後京極摂政

源有房　源有房

源和義朝臣　源和義朝臣

前参議忠定　前参議忠定

羽通法師　羽通法師

前中納言定家　前中納言定家

新拾二　ぬれてほすたもとの露の

新後二三　うきよをそむくにつけても

同三　うきものはうきものとのみ

風四　うきものはうきものとのみ

新拾一　人うらめしくおもふにも

新拾雑下　本おもふにもうらめしく

新後古四　なのみの川のうきせをも

風雑中　なのみかは那波の宮

新拾雑中　我ぬれぎぬやうきものは

新後古五　かくやとなほうらむらん

風雑下　いつに思いのうらむらん

深三郎有教　深三郎有教

順徳院御製　順徳院御製

後二条雅世女　後二条雅世女

諒徳公　諒徳公

達智門院　達智門院

式場歌　式場歌

前中納言定家　前中納言定家

後人丸　後人丸

按察使院御製　按察使院御製

源教春　源教春

権大納言頼朝　権大納言頼朝

正二位隆教　正二位隆教

風雅下
新後撰雅下
風雅下
同冬
新千雅下
新後拾雅下
風雅下
同雅下

けの浦に雪分わびつつ暮れ行く空も
けさ晴れてその名も高き富士の嶺も
霞めるうちに雪降りて雲間の月ぞ
あさましきこの世の夢の雅経
雅経
雅経

の

新千載詞書ニ
同
拾上
新拾
哀
同
拾上
風
雅中
同
雑下
同
雅中
同
拾上
新拾
哀上
風
雅中
同
雅上

ひさしよ人にそふもよし
位山はいくたひつゝ我
ねても守よ秋ま萩
なひてなれ袖もしほ
なふと松をまおれく
常なめるよ世乃さの
袖そ仇柳うき
枕ふれ袖もうるゝ
まてしもみちもなき
夜乃ふけゆくまの月

源仲緒
源泰氏朝臣
境空上人
永福門院
欽明門院
権大納言公宣
院御所
永陽門院
従二位為子
覚善法師
太上天皇
平康頼
法印慶運
贈従二位為子
道勝法師
橘直幹
綾小路俊量
菅原為長

冬
新拾
雑冬
風
冬
同
雑中
新続古
巻二
新続古
巻四
新千
巻二
新拾
巻二
新続古
巻二
風
雑中
同
巻三

あれはのゝ松ふく風そ
池水よりもまつけ
なりてうゝあさけれ
天乃原ふりさけみれ
秋ちとせ月
立ちなれやうき
夏よりにあいこゝ
あしたもうらゝ
おもひみやちとせ
ひてはうみ
山乃端と出ぬと
やうにわとたのまれ

太上天皇
二条為定
女房奉書
覚善法師
太上天皇
永福門院
平康頼
法印慶運
贈従二位為子
道勝法師
橘直幹
綾小路俊量
菅原為長

の字七千そ

む

風雅上
かくてそみるへくうつれる山乃
彩千秋上
吹こしに姫たのうつろふ秋て
彩指環上
草ゝゝみもあるゝ神さひ
彩千秋下
妹こゝ乃花ちる風ゝゝむしろふ
彩林雅上
つゝもる物かゝもゝゝゝまさる乱
風色ゝ
さゝわりて此夜月をいつみ
彩紋格名ゝ
河よりも鏡ゝみゆるかゝゝ
風雅中
みゝをゝ心ゝゝ狂あるうゝ
彩續古今
むしゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
新千載
むしゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かくてそみるへくうつれる山乃　今来和歌集
吹こしに姫たのうつろふ秋て　権納言雅
草ゝゝみもあるゝ神さひ　後京極摂政前太政大臣
妹こゝ乃花ちる風ゝゝむしろふ　後京極摂政前太政大臣
つゝもる物かゝもゝゝゝまさる乱　後京極摂政前太政大臣
さゝわりて此夜月をいつみ　後京極摂政前太政大臣
河よりも鏡ゝみゆるかゝゝ　後京極摂政前太政大臣
みゝをゝ心ゝゝ狂あるうゝ　後京極摂政前太政大臣
むしゝゝゝゝゝゝゝゝ

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古忘々　雲ゐにてみし秋の月もわれも世にふるほどぞながめられける　藤原俊成

新拾哀　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新後古雑上　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古賀　君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで限りしらなん　藤原俊成

新千交　さざれ石の巌となりて苔のむすまで君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで　読人不知

新秋雑中　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新千雑下　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新後古天　みるからに老いぞまされる鏡山いざ立ち寄りて見ばや見ずやも　後鳥羽院

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古忘々　雲ゐにてみし秋の月もわれも世にふるほどぞながめられける　藤原俊成

新拾哀　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新後古雑上　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古賀　君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで限りしらなん　藤原俊成

新千交　さざれ石の巌となりて苔のむすまで君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで　読人不知

新秋雑中　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新千雑下　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新後古天　みるからに老いぞまされる鏡山いざ立ち寄りて見ばや見ずやも　後鳥羽院

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古忘々　雲ゐにてみし秋の月もわれも世にふるほどぞながめられける　藤原俊成

新拾哀　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新後古雑上　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古賀　君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで限りしらなん　藤原俊成

新千交　さざれ石の巌となりて苔のむすまで君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで　読人不知

新秋雑中　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新千雑下　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新後古天　みるからに老いぞまされる鏡山いざ立ち寄りて見ばや見ずやも　後鳥羽院

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古忘々　雲ゐにてみし秋の月もわれも世にふるほどぞながめられける　藤原俊成

新拾哀　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新後古雑上　我も世にふるさと荒れて月ばかりもとの光にて宿の秋風　藤原俊成

新千雑上　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　在原業平朝臣

新後古賀　君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで限りしらなん　藤原俊成

新千交　さざれ石の巌となりて苔のむすまで君が代は千尋の底の石木まで苔のむすまで　読人不知

新秋雑中　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新千雑下　長月や空晴れ渡るうそ寒み霜置きまよふ菊の白露　藤原為家

新後古天　みるからに老いぞまされる鏡山いざ立ち寄りて見ばや見ずやも　後鳥羽院

彩指雜下
彩後古惣又
風雜中
風忘
彩松上
新指玄下
新格足
風秋中
彩千玄一
新後古玄又
日赤
新千神

み人わ　彩ちさわの一世よ
しーかうれ　玄乃れ梅　光春花出梨
しーおうり礼　玄乃れ梅　櫻雪後寒年
しーかうこ　ゆくこ　中若
しーかうれ　中若
しーかうれ　佐二佐乃子
しーかうれ　大納言経信
しーかうれ　玄乃　中若、具平親王
しーかれ　雙枝上人
しーかれ　平忠度朝
しーかれ　よし人石和
しーかれ神の　仮名序
しーかれ　仮二業平乃玄乃
しーかれ　今二玄乃
しーかれ　佐佐氏久

彩指雜
風親下
新千雜中
彩後古神
彩後終親玄
新千親上
風親下
彩千衰
彩後古親中
彩千衰
風親下

しーの江よ　神われて　万葉乃歌
しーかけよ　乃をかきや　素行経
しーの江よ　ゆくこゆくる　素行朝臣
しーかけ　忠岑朝臣
しーかけ　梅中納言兼輔
しーかけ　佐中納言朝綱
しーかけ　佐下総
しーかけ　佐朝臣忠
しーかけ　素行朝臣
しーかけ　玄乃歌仙
しーかけ　仮業平朝臣
しーかけ人の　撰人石和
しーかうて神や　西行法師
しーかけ　よし人石和

ふりて　世てふ　なき中も　ふるさとて

きてもとの　水の　もとの　ふるさとに　あらねど

恋死ぬ　波や　うき　月の　さりふ

ゆく　水も　なき　ふるさと　死ぬ　ふ

むら　月も　波よ　くもる　ふるさと　は

ふるさと　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

なみて　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

今返　なに　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

わが　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　百代の　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

きく　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

手折て　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

庭の　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

舟つく　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

なく　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

初雪の　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

ふる　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

彩投指 志公
新後古 親上
彩指 袁
彩後古 志五
新千 親下
日 秋上
彩後古 志二
彩指 袁
風 親下
新續古 雑下
彩千 袁
風 親中

わすれんと思ふ心ぞ神にうき
我ならぬ人もあはれやかけらんと
あさくら宮に今朝ぞ月はきく
秋ふかき夜半の嵐に雲はれて
なみしきこゆる沖の白菊
いにしへも昔をかけて秋の月
清くかはらぬ影ぞ残れる
なかめきて久しくなりぬあはの原
波間よりこぐ舟人の声
みるめ生ひ荒れ果てぬらし蘆の屋の
山さとの池も氷ぬ
山風よ吹きな散らしそ池水に
底まで澄める秋の夜の月
月ぞすむ秋の光を添へてこそ
雲井の雁も鳴きわたるらし
月ぞすむ秋の光を添へてこそ
雲井の雁も鳴きわたるらし

風 袁上
新後古 志上
彩指 冬
風 冬
風 秋中
風 秋中
彩指 親上
日 秋下
彩投指 親秋
彩千 志一
彩投 志二
彩千 袁上

春ごとにあらそふ人の花心
いかにうつろふ色と知りてか
春風に吹きまがへたる梅の花
香をたづねてぞ人は知りける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける
春風の吹きとくる池の氷間は
波もうれしき色ぞ見えける

新拾 春上　おもかげさらさらそでの
風 春上　梅ぞあまりて月ぞ新しき
新後古 春上　袖人乃ふるさとの軒のつま
風 春上　一むら雨乃名こそおしけれ
風 春上　さそはれぬ夫人でうらもなし
新拾 春上　春風乃匂ひやたえぬ
新後古 春上　まそでをみちの奥
風 春上　雪ふかき山乃あなたの
新後拾 秋上　雲むらさめ乃ふるさと
日 秋上　夜乃一村雨
新後拾 秋上　庵さびし煙乃末乃
日 秋上　如月乃
新後拾 秋上　中乃
日 秋上　夕立乃
新後拾 秋上　一むら雨乃

梅ぞ香乃
梅ぞあまりて
梅ぞさそふ
梅乃こぞ乃
梅ぞそれ
梅ぞそれ
梅ぞそれ
梅ぞそれ
梅ぞそれ
梅ぞそれ

幸持院殿
後京極
遍昭
権大納言
後鳥羽院
後京極
後京極
後京極
後京極
後京極

風 冬下　雪ふかき山乃
新拾 秋下　雪ふかき
風 恋二　雪ふかき
新後拾 恋上　雪ふかき
日 恋上　雪ふかき
新拾 恋上　雪ふかき
新後拾 恋上　雪ふかき
風 恋上　雪ふかき
新後拾 恋上　雪ふかき
新千 恋五　雪ふかき

永福門院
後京極
左近中将忠秀
出羽弁
前大納言為世
後京極
後京極
後京極
後京極
後京極

新拾遺 忘中
いそのかみふるき中河乃あとせ
新千 忘三
なるとハ海うなかき浪なしかも
新拾遺 旅
嵐吹野原乃草なれや
同 冬
風さむき山をおれいのかりこ海
新拾遺 忘三
うとも雪ハ夜ふかくまて
新千 忘三
ふりつゝ雪ハ降けり
同 冬
山ふかみ井ゝの岩ほのさゝれ水
同 恋
清井てぬるゝ人もなくて
同 恋
我のみくまむ玉井の水
新千 秋下
霧たゝ雁ハ菊ハ花乃うへ
新拾遺 恋三
しるひとそなき
新後古 恋五
ものゆへいふもの乃ふれ水

しるひとそなき
新拾遺 神祇
ふたもゝ代ふとも
しるひとそなき
源釈抄
ふるき海うなかき浪なしかも
しるひとそなき
新拾遺 春
嵐吹野原乃草なれや
しるひとそなき
法眼隆春
風さむき山をおれいのかりこ海
しるひとそなき
藤原為相
うとも雪ハ夜ふかくまて
しるひとそなき
為定
ふりつゝ雪ハ降けり
しるひとそなき
後京極為子
山ふかみ井ゝの岩ほのさゝれ水
しるひとそなき
祝部行親
清井てぬるゝ人もなくて
しるひとそなき
為忠
我のみくまむ玉井の水
しるひとそなき
藤原俊秀
霧たゝ雁ハ菊ハ花乃うへ
しるひとそなき
前大納言為世
なるとハ海うなかき浪なしかも
しるひとそなき
為世
ものゆへいふもの乃ふれ水
しるひとそなき
法印守通
神のみつかき

新拾遺 雑上
煙風ハ浦ふく吹ぬにかり乃
新千 春上
風ふくさとの柳乃かけそよ
新拾遺 雑上
吹ませ風のやとれ萩のくに
新拾遺 羇旅
旅の人我をたれかとゝめん
同 雑上
うくひす聖人の小荒乃神やしろ

煙風ハ浦ふく吹ぬにかり乃
しるひとそなき
権律師仙覚
風ふくさとの柳乃かけそよ
しるひとそなき
前大納言為重
吹ませ風のやとれ萩のくに
しるひとそなき
後京極為子
旅の人我をたれかとゝめん
しるひとそなき
権中納言家経
うくひす聖人の小荒乃神やしろ
しるひとそなき
前大納言為世

うきたなきわれなれな世ニ一時ある　彩千夜
うき冬枯池のうらにのこるそうるハ　日冬
うき毛ぬ雲やいてくるらん　彩拾冬
うきよたきやいそなよしそ冬の　彩拾冬
うきにのこるとくさけくもさされ　彩拾歳上
うきねなかるもわれ草　新千忠五
うきさそなきくれそ　日天
うきいろいしそ月新　風夜
うきよなるすもう袖れ　彩拾雑秋
うきねそ中と恨やもる　彩千冬
うき出そのやみそなそ　彩拾春上
うき出沼なそ

源邦長朝臣
拾遺和歌御製
菜好法師
順徳院御製
源邦氏
菜好法師
順徳院御製
芳池利華院前宮内卿

うき掛そ者に袖忘れな　安倍忠良
うきそけぬそ忘そ袖そ　初月法師
うきぬそれ袖そ人ひら　俊定卿女
うきぬそ人やそそて　権大納言定房
うきぬなれ袖そ　中宮大夫宗朝
うきれそあるそ出そのそ　拾遺抄撰者
うきれそ我そみそく　弁内侍
うき袖そ沼袖そ　従三位季綱
うきぬ袖そ沼袖そ　今宮宗朝
うきそ袖そ　今宮宗朝
うきそ袖そ　権納言行成
うきぬ袖そ　馬内侍
うきふそまぬそ

拾遺抄撰者
今宮宗朝
今宮宗朝
権納言行成
馬内侍
拾遺抄撰者

彩千旋
彩拾忘二
新後拾忘二
新後古恋三
彩拾忘一
彩千春上
日雑下
風旅
彩拾尺
風天
彩千雑中
風尺

新千載中
風雅
玄又
新千載
玄中
風之
玄一
新千載
玄下
風雅
玄又
新千載
玄一
新續古
新上
風雅
新上
風玄
玄下
風雅
新下

ゆふされば秋をうつすや中そよ
ぐ風のおとさへ露のやどりに
秋ふかきあまの苫屋のいたまあ
らみ月をもるなり人の
うらみを
大ぬさにたのむしめこそまた人
の
こころもしられぬさとをみそめ
の
庭ふきまよふもくやしかれてい
ぬ
秋をまつ月をもかこつ袖の露
風
人こそあだの心なりけれ
ものを
みしをうらみてうらなき相思
の
なかもしをいかにせよとや月
ゆへ
物思ふ袖の涙の
うらめしき
風
秋ふかき夜半の嵐の
ふきまよふ
庭の木の葉の
ゆへ
風
秋ふかき夜半の嵐の
ふきまよふ
庭の木の葉の
ゆへ

惟宗光廷
侍従俊朝
従三位仲俊
従三位親
永福門院
按察使公宗
中納言兼
参議雅
従二位為
定
権大納言
公秀
従二位為
定
権大納言
公秀

風雅
恋四
新続古
誹諧
風雅
秋下
風
玄一
風
玄中
風
玄下
新続古
玄又
新拾
玄中
風
秋下
風
玄下

うらなくてよくねしものを
さむしろ
ゆめ
ゆめ
ゆめ

新千 巻下
みそてなれてす山吹乃
彰指 志一
久叫毎年山をこえもみれて
彰長 巻下
うれそくをとわれ相よを
新拾 秋上
婦そ乃庭ち元乃をを衣
新続古 巻下
乃神つ元の相となしれを
彰拾 就上
久仕そ叫毎てかる山乃くれ
彰千 巻下
さて元をえまよ山路よ
月 志又
元中へあそくへをめてれつさ
彰続古 秋下
さよ衣いふをめてう者をます
彰千 婦下
乃寓乃をろ比そあ毛
新続古 秋下
ましてみ月もあ叫ようにう
彰指 天
世中れつ乃とうれと婦れ地乃

うれつ山をや井をれ乃てくそ 清原元輔
うれつ神れそやまうへん 法下之為
うれつ月そ元よりり月 邦長朝臣
うれつ月も新をみそく 同家
うれつ雪しにまし乃山風 寛重法師
うれつ雪しに姉風そ吹 仮名序例作
うれつ雪れ沼そさめす 往往成実
うれつまくしへそそて 往往重遠
うれつ吐乃寓しのへん 松家法師
うれつ雪ろめさよ 恵慶法師
うれつ重れうめさよ 往往成実
うれつ重れまそれ 権納言為
うれつへうう叫そみき 恭敬法師

彰千 巻下
乃乃くへうう山さくうれ
彰長 巻下
うれつへゆくう井を生河
月 巻下
うれつへをすみをうへん
風 秋上
うれつそれてくくう元れ
新指 夏
久仕世よ妙元山色れやよ梅
風 志二
乃神つ袖れかはうむうにく
彰続古 冬
うれつ元うなりうあ也乃ふ
風 雑中
うれつ元うなりうあ也乃ふ
彰拾 秋下
うれつそくをうへ山れつを
月 志又
うれつそくをうへ山れつを
風 雑中
うれつ元うなりうあ也乃ふ

源純氏
今上御製
為家卿
為家卿
為家卿

新千
夏

大井河山のしらなみかけて久乃
月草にそれなる衣乃きもとも
うれしやそれとみるかなよとし
人とつき後よみやかきとたれやそ
うれしきをそとえなゆめ
うれしき神まてき風を吹
うれしみとも松そすゝ
うれしきよれ如乃ふれる
うれしきうみれ夜の新れ
うれしきぬきこて凡
うれしきこそ家れ白雪
うれしき添一かて大の新
うれしきもしあされ衣

新拾
秋下

風
冬

新千
夏

新後古
雑上

新拾
夏

新拾
秋下

新千
恋五

新拾
秋下

新拾
秋下

新千
賀

月
忘二

日
忘三

新拾
忘二

新拾
尺

新後古
雑中

新拾
忘三

新千
雑下

風
雪下

吉野川さらくなれ一筆書
おと新れなふみるんます鏡
あるへ山ちぬの葉れをなる
さちこもる芳れ緑乃久てよ
くそうまんとすんん池そな
あるへみる姿をたのこに一かい
人めくまれてちれちたた
うたれまくるく人と愛して
愛とも引我まれ衣乃うかい
愛れ世よみちかるうれもと乃
志乃一野み林乃愛てきやぬ
愛とをあるる地とおりて

新拾
秋下

風
冬

新千
夏

新後古
雑上

新拾
秋下

風
雪下

大井河山のしらなみかけて久乃
月草にそれなる衣乃きもとも
うれしやそれとみるかなよとし
人とつき後よみやかきとたれやそ
うれしきをそとえなゆめ
うれしき神まてき風を吹
うれしみとも松そすゝ
うれしきよれ如乃ふれる
うれしきうみれ夜の新れ
うれしきぬきこて凡
うれしきこそ家れ白雪
うれしき添一かて大の新
うれしきもしあされ衣

新千
夏

新後古
雑上

新拾
秋下

風
冬

新千
夏

新後古
雑上

新拾
秋下

新千
恋五

新拾
秋下

新拾
秋下

新千
賀

月
忘二

日
忘三

新拾
忘二

新拾
尺

新後古
雑中

新拾
忘三

新千
雑下

風
雪下

吉野川さらくなれ一筆書
おと新れなふみるんます鏡
あるへ山ちぬの葉れをなる
さちこもる芳れ緑乃久てよ
くそうまんとすんん池そな
あるへみる姿をたのこに一かい
人めくまれてちれちたた
うたれまくるく人と愛して
愛とも引我まれ衣乃うかい
愛れ世よみちかるうれもと乃
志乃一野み林乃愛てきやぬ
愛とをあるる地とおりて

新抄 雑中
愛のこさもうつてもあるへきを
いふもんうれし侍るこれうかる
日 忘心
あるよう愛しのこもまれつ
彩綾古 忘三
うつしもてとも思さるつ
日 哀
うつしもてとみるそうれ
日 秋下
あるへしくれのもんもん前れ哀
新抄拾 旅
うつれ山をてもとるをも
彩綾古 冬
うつあせるれやもしる
日 賀
白妙乃里をもて神よつる
新千 秋下
いろかをみまれ乃屋まれ
新抄 恋一
まれるを新のこみ中月まれ
風 秋上
ふむもみ山ち乃雪をうて
新抄 神
のうへきをへのうあるこ山

公任卿家歌合 承保
前中納言匡房卿家歌合 永
後拾遺 恋四
後拾遺 雑二
堀河院御製 康和
後拾遺 雑四
後拾遺 雑二
前中納言匡房卿家歌合 永

風 秋上
いふもんうれし侍るこれうかる
新千 賀
松のえうみとをれつまを池水よ
風 神
九重にあまてる神れをうけて
彩抄 秋下
津をきる山乃松まれれかる
新綾古 哀
これるをとうれ哀れの月
風 秋下
等うをかるうれつをも新をこう水
彩綾拾 旅上
おつれのうをうやまるれ
彩拾 秋上
雪井をてうやまるう水清を
彩綾 秋下
これ哀れとれうを哀今をは
彩千 物名
つまうる姫れ風れ吹
新抄 冬
なるをわうるれ
新千 秋下
うれ風とをあうら侍山

後拾遺 秋下
後拾遺 雑二
前中納言匡房卿家歌合 永
後拾遺 雑二
堀河院御製
後拾遺 雑二
前中納言匡房卿家歌合 永

新拾冬　羇旅

題しらず　　よみ人しらず

難波こと　汀ありて　に書きて

新千載　雑上

住すみよし　の松を人こそ　恵慕法師

新拾遺　雑上

あまの小舟　恵慕法師

新後拾遺　雑上

綱手かなしも　藤原為相

新千載　雑上

袖うち　藤原為相

新後拾遺　雑上

さ夜の衣　藤原為相

新千載　雑上

夜衣の　藤原為相

新拾遺　雑上

初草なれや　藤原為相

新後拾遺　雑上

来てかへる　藤原為相

新千載　雑上

かへるさの　藤原為相

新後拾遺　雑上

別れ　藤原為相

新千載　雑上

別れ

新後古 三上
新拾 三下
日 忘五
新続拾 忘五
日 忘二
月 三上
新後古 雑上
新拾 忘五
新続拾 六一
日 忘五
新後古 秋上
新拾 忘五

うゐかてみさをにうゑしなでしこの
うちとけてねもみだれつつ
山風のさそふ衣の四方よりも
さてもみやまに秋はきにけり
うつろふを思ふものから
うつみつるをも思ふにて
新続拾 忘五
津の国の
日 忘二
なにはえのあしのかりねも
うつみんへき心ちこそすれ
月 三上
これやこの
うらみわびぬる身をうきなにおはせの
新後古 雑上
新拾 忘五
関こえてゆくかりがねの
うつみよりつきて出る
新続拾 雑上
秋風よ
うつみんとおもふこころやたれ
新続拾 忘一
日 忘五
なにはえのあしのかりねのうきふしを
うつみわびぬるわれやこゆらん
新後古 秋上
新拾 忘五
ながめつるけさはかすみて
うつみもわかぬあまの袖かな
権納言為重
うつみんとおもふこころやたれ
亀山院
小倉殿
うつみわびぬるわれやこゆらん
刑部卿局
うつみよりつきて出る
平親清女
うつみんとおもふこころやたれ
勝尾師経
うつみわびぬるわれやこゆらん
後宇多院
うつみよりつきて出る
後伏見院
うつみんとおもふこころやたれ
後二条院
うつみわびぬるわれやこゆらん
後伏見院
うつみよりつきて出る
後宇多

風志三
人こそ一今はた思ふこともきえて
風旅上
うきまでよ人をとふこそあはれなれ
風志四
ふるさとは花ももみぢもなかりけり
新拾冬又
秋ふかき心はいづくしぐれ雲
日春上
梅の花たれをあるじとしらん人
新後拾志一
さく花の香やそでにうつるらん
新續古秋上
袖ぬれてむすびし水のこほれるを
新拾冬又
今こそ春のしがらみとはなれ
日旅上
長夜をおもひあかしつるかな
新千旅中
おもひ入ふもとの雲やたえぬらん
日夏
ふもとの里のあけぐれの空
新千夏
あさみどり糸よりかけて白露を
日恋一
なみだくらべにやどす袖かな
新拾雑秋
玉柳みどりの枝のうへもなし
風春上
庭の雪踏みわけてこそ
風旅上
年ごとに春はきぬれど古郷の
新後拾冬二
みやこにてうき音をのみぞ
新千春
うぐひすの声
日春
なきて世をうらむる人のおほかるに
新拾冬二
うき世をいとふ山ぢもあらなくに
新千雑中
うき世をいとふ人ぞ山には住む
新千雑中
うき世をいとふ人ぞ山には住む

新後古 非
石清水みのきに契るさかえにて
風 非
かく豊けきよの喜こびをそ
風 祝下
こととさうのつそ祈るれ
同 忠三
それ約束さけ海そも川かつ
同 忠四
かうしるしてうみそのつよ
新千 忠三
たれそそ袂しのくれのや
新拾 忠四
今えんと祭一波そもやそな
新後古 忠二
もろて祈むをなるもや
新千 衣
男へてみあ申れわれぶふ
新後古 忠二
さをとりてれそいつるし
新拾 祝中
立ち祝そうのき世中の
新千 忠三
そくしんようもそ祝まて

新千 忠三
たうめそたそ祈くうつのと
風 忠四
つてたをと祝とをなくかの光
新千 恋二
御一世よあうとのしをそ
新後古 祝中
ひも海そ地をれなくて
同 忠二
なくきに男のみてやたのうん
新千 忠二
をかつをにうき今下かうそ
新拾 恋二
いふうん心へこれるうれやし
新後古 忠二
鬼乃祝を男ふれやてうん
新千 忠三
一つとに汐をやせもしのりう
新拾 恋三
おう一へ歌しらそのをれて
風 祝下
これまてとおりよいうそあてよの

新後古 雑中
日 志二
新拾遺 雑下
日 志二
新後古 志ニ
新拾遺 雑三
新拾遺 志二
新千 志三
新拾遺 雑上
日 雑下
新千 志五
風 志三

うてしにわれさき神よつまよそや
うそのくさまあつよてなのしる
うらうくそられねとあるよみ
うあまてのはそうや今そく
うくいう世絵み一年月流
うくくへのおたつまてをやめま
うくおてなくつしこおて
うれまそてねそのこれ
うれおよい世そをけう
うれ河しれおれぬへ
うれ年月さへてうう
うれそうみねそへよけう
うれをもうんねいう
うれをうそ思そめ
うれをうそみれて
うれをそねいをみ
うれをそねみそのまる
うれをそねみそのまる
うれをそねみそのまる

新後古 雑中
和泉式部やすかた君うせたるころ
うう

風 恋五
とつつかりいつれをまことあさ
うう

新千 釈下
心あてにそれかとも見へわく
うう

風 恋四
白露もやどりさだめぬ秋の夜の
うう

新千 釈下
月そ哀なる
うう

日 雑中
後京極摂政
うう

新勅 釈下
秀能
うう

新後 釈中
山ふかみ
うう

風 釈下
春こまやかに
うう

新千 衣
うつろはぬ
うう

新続 衣
ものとてや
うう

新千 釈上
うう

新指 雑中
風 尺
うう

風 雑中
山ふかみ
うう

新拾 釈下
春こまやかに
うう

新後古 雑中
うつろはぬ
うう

風 雑下
ものとてや
うう

新千 衣一
うう

新指 雑中
風 雑下
うう

新千 釈下
うう

日 雑中
うう

新後古 雑中
うう

風 雑下
うう

新千 衣一
うう

和泉式部やすかた君うせたるころ
うう

風 恋五
とつつかりいつれをまことあさ
うう

新千 釈下
心あてにそれかとも見へわく
うう

風 恋四
白露もやどりさだめぬ秋の夜の
うう

新千 釈下
月そ哀なる
うう

日 雑中
後京極摂政
うう

新勅 釈下
秀能
うう

新後 釈中
山ふかみ
うう

風 釈下
春こまやかに
うう

新千 衣
うつろはぬ
うう

新続 衣
ものとてや
うう

新千 釈上
うう

新指 雑中
風 尺
うう

風 雑中
山ふかみ
うう

新拾 釈下
春こまやかに
うう

新後古 雑中
うつろはぬ
うう

風 雑下
ものとてや
うう

新千 衣一
うう

新指 雑中
風 雑下
うう

新千 釈下
うう

日 雑中
うう

新後古 雑中
うう

風 雑下
うう

新千 衣一
うう

新千 釈中
新千 釈下
月 尺
風 釈下
風 去下
新後古 釈中
風 釈上
風 釈中
新後古 釈中
新千 釈上
新拾 天
風 釈上

そしてきみをわすれて
くれとのみいふことのはぞつれ
なき
みるをのみ
ながらとてもかひもなし
あらでのみある
山ぬしもしめ物ぞかし
山ぬしもいでこそ
西へ行月をいかにまつ
雨ぬしもしへき山水よ
一ときに思ひそめてわれこそ
いつまでかはとおもひしへき山水よ
山ぬしもいでこそ
西へ行月をいかにまつ
雨ぬしもしへき山水よ
一ときに思ひそめてわれこそ
いつまでかはとおもひしへき山水よ

うれせてきみをうらみし波のうへ
うれせてきぬ心なりけれ
うれせてそてみ
うれせてみをよそもきき
うれせのうきにそもしみ
うれせのみにいつくのそん
うれせの外のつかつくのそん
うれせのあをしをそれ
うれせのやをしのみ
うれせのさのみ
うれせの中のうきれるくさ
うれせのやをそんをん
うれせのやをのみ
うれせのさのみ
うれせの中はかりとも
うれせの中よ新つまえる

新千 釈中
新千 釈下
月 尺
風 釈下
風 去下
新後古 釈中
風 釈上
風 釈中
新後古 釈中
新千 釈上
新拾 天
風 釈上

物ぞかし
物ぞかし
新後古 尺
月 尺
風 釈下
新拾 尺
新後古 尺
風 釈下
風 釈下
新千 釈下
新拾 釈上
新拾 志

うれせの中のうきれるくさ
うれせのやをそんをん
うれせのやをのみ
うれせのさのみ
うれせの中はかりとも
うれせの中よ新つまえる

俊子内親王
読人不知
俊実卿
後拾遺 雑
天台座主源
院の宰

後宇多院
宰相典侍
冷泉為尹卿
信実朝臣

旅とてもかくもせでいかへらむ沼捨
風 秋下
歌あまたよみけるところにて大井河
新千 忘三
日ぶさへて思ひやるかな大井河
新拾遺 忘二
なのむとも今はのれいかにおもはん
風 忘五
さらにとてうみをやそめん中々
新千 忘二
思ふ人の松とてもおなじみどりに
新拾 雑下
なほ松にふかきめぐみをたのめとや
同 雑上
思ふ人千代のあきまでもとまる
新千 忘五
なくにかへすとてかの
新後古 忘四
浪をいかにや形見の袖よとて
風 恋一
あひ思ふ色とてそへたれなれど
新後古 忘四
なほ人目さへ忍ぶるかな
雅有入道
旅衣名残の浦に二年乃秋
九条前左大臣家

人にわれ思ふ事とは聞えつつ
新千 忘五
あふさかやそこしの関の杉ならば
同 恋一
なほ思ふ事ぞ絶えまし
新後古 忘一
あひ思ふ色とてそかさぬ
新千 雑中
寄る波々かけじとぞ思ふ
新後拾遺 忘四
忘れてや世に経ぬらん
雅中
これと人あまた思ひそめてや
新千 忘二
あふさかの関ならねども
新後古 恋五
なりにきまたその後せめてさは
同 忘五
忘れじと思ふ世ぞかへすがへす
風 雑上
さ寝やとて今日の海乃蛎風よ
新拾 雑中
しのぶれど色にいでぬべし乃

新拾遺一　ゐてこそやらめうらみわびほさぬ袖だにあやしこひぢかは
新千載中　九重にみちもとどろにきこえあげてよよの君が代をまつ
新後古今載下　ゐてこそ思ひそめしかわかの浦や世中の人
新千載中　里つれば門田の稲葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞふく
同　載中　須磨のあまの塩やく煙風をいたみ思ひもあへぬ恋もするかな
新千載雑下　世をそむく人とはなしに山里にうれはしげき月をみるかな
同　載中　それをだにうらみぬものを秋風に山の木の葉の散るころかは
新拾遺五　山ちかく吹きこす風の寒ければ衣打つ声ぞ夜ふけにける
新後拾遺載冬　大井河浪に月影ふけゆけばいかだのさをのおとぞかすかに
新拾遺冬　みそぎして賀茂の川風身にしめてうたたねさむき夏の夕暮
同　載上　山里のかきねをとへば時鳥ひとこゑ過ぐる夏のゆふぐれ
新後拾遺載夏　ふるさとの花橘のにほふにもうつりし袖の香ぞなつかしき
新千載雑上　心にもあらでうき世にながらへばまたこのころや忍ばれむ
同　志五　おもひ出でよ袖に涙のかかるとき月やは物を思はざりける
新千載雑上　大方の秋の空だにわびしきに形見の雲をいかがながめむ
新後古今雑二　大井河浮かべる舟のかがり火にまがふ方なき秋の夜の月
同　雑中　ながめつつ思ふもものの悲しきに秋風吹くな荻の上の露
新拾遺雑中　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月
同　雑上　ふるさとの荒れたる庭の浅茅生に昔をしのぶ虫の声々
新後古今雑上　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月
同　志五　心にもあらでうき世にながらへばまたこのころや忍ばれむ
新千載雑上　大方の秋の空だにわびしきに形見の雲をいかがながめむ
新後古今雑二　大井河浮かべる舟のかがり火にまがふ方なき秋の夜の月
同　雑中　ながめつつ思ふもものの悲しきに秋風吹くな荻の上の露
新拾遺雑中　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月
同　雑上　ふるさとの荒れたる庭の浅茅生に昔をしのぶ虫の声々
新後古今雑上　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月
同　志三　山ちかく吹きこす風の寒ければ衣打つ声ぞ夜ふけにける
新千載雑上　大方の秋の空だにわびしきに形見の雲をいかがながめむ
新拾遺雑中　ながめつつ思ふもものの悲しきに秋風吹くな荻の上の露
同　雑中　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月
新後古今雑二　大井河浮かべる舟のかがり火にまがふ方なき秋の夜の月
新千載雑上　大方の秋の空だにわびしきに形見の雲をいかがながめむ
新後古今雑上　ながめやる袖の涙の露ばかり昔にかへす秋の夜の月

新後古 雑上
新千 恋二
新後古 恋四
風 恋四
風 恋三
新千 恋四
新拾 恋二
新後古 雑中
風 恋三
新拾 恋二
新後古 雑中
月 釈中
新後拾 冬

秋ぞ来にける
初瀬にて恋ひて渡りける
あふと見る夢や昔の夢ならむ
さめぬ夜人の心ぞいかにせし
絶えじとしかけし命ぞ
おもひ寝もかよひやはせぬ
あふと見しかひなの月の
人恨ぶる心ぞ
いかにかくしも命なるらむ
逢ふと見て夜半に更けぬる
人もなき海辺のおのが
恨みじと思ひ捨てしも
いかなれば
逢ふと見しかひなの月の
いかにせよとて
逢ふと見て
逢ふと見しかひなの月の
逢ふと見て

二条后
二条后
源持之朝臣
二条后
二条后
後恵法師
権大納言
永福門院
馬内侍
源光忠
権大納言

新後古 神
新拾 雑下
新後古 恋五
新千 物名
新後古 冬
新千 恋三
日 恋一
風 冬
新後古 雑下
風 雑下
新後古 雑中
風 雑中

ここのへに
霜枯れの草
女帝花をみ神にて匂ひおれ
世の人の
暁の
せきもあへず
あさぢふの
秋を山もひびくまで
川の瀬よ
吹風を
みよとこそ
ここのへに
霜枯れの草
女帝花をみ神にて匂ひおれ
世の人の
暁の
せきもあへず
あさぢふの
秋を山もひびくまで
川の瀬よ
吹風を
みよとこそ

正三位
周防内侍
権中納言通俊
二条后
権中納言実房
中務卿宗尊親王
従下定為
従四位上
成恩寺関白
従五位下
順徳院御歌
従四位下
源光行

新千秋上
あさまだき風吹いせきれてゐる
うちそよぐ衣手涼しも
新千秋下
夏衣かさねつゐきてうすもの
風交
なくてみまたれ相坂のせきの
うちそよぐ衣手涼しも

二百六十二首

新後拾交
五月雨にさくらの花をうつしては
さわく谷の秋とこそきけ
新後古交
ねぬ夜ふけて月の出の
新千秋冬
初雪よりふりつゐて雪の
新千霧
ねぬ夜ふけて月の出の
風冬
ねぬ夜ふけて原をかりまて
新後拾交
ねぬ夜ふけて月の出の
新後古交
ねぬ夜ふけて原一枝うりは
新千秋冬
ねぬ夜ふけて月の出の
風冬
ねぬ夜ふけて原一枝うりは
新千霧
ねぬ夜ふけて月の出の
風冬
ねぬ夜ふけて原一枝うりは
新後古霧
ねぬ夜ふけて月の出の
風冬
ねぬ夜ふけて原一枝うりは
新千秋冬

十一首

の

新後古 雑上
新拾 雑去
新後古 雑中
新千 雑中
新後古 雑中
新拾 雑中
新千 哀
内裏 雑下
新後古 雑上
日 哀

なれて行袖はなれうきそらや
春ゆくかたをゆめさめてと
秋ごとにうき世よ松やつもるへき
ふりそふれとも老山よりいでて
ふるさとの月と契りし鴻雁も
なれて世中をへてぬる夜の
ふりぬるみちのしるへとたのまれて
ふるき都の春と成
ふるき跡こそ山
ふるき神垣
二本は歌と
ふるき跡こそ
ふるき都の春
ふるき跡こそ山
ふるき跡こそ山
ふるき跡こそ山

源教親

春ゆくかたをゆめさめてと
秋ごとにうき世よ松やつもるへき
ふりそふれとも老山よりいでて
ふるさとの月と契りし鴻雁も
なれて世中をへてぬる夜の
ふりぬるみちのしるへとたのまれて
ふるき都の春と成
ふるき跡こそ山
ふるき神垣
二本は歌と
ふるき跡こそ
ふるき都の春
ふるき跡こそ山
ふるき跡こそ山

新拾 衣 / 新千 雑上 / 風 雑上 / 新続古 雑上 / 風 雑上 / 新拾 秋上 / 風 雑上 / 新拾 冬 / 新続古 冬 / 新千 秋上 / 風 冬 / 新続古 冬

君かため津井のたこそつまつめ　暁長
春をまちいつる雪のふれハとや　従二位家隆
跡人の若なハ雪やつもらん　小弁
跡人のそなたをみやるまもなく　権大納言公雄朝臣
跡人の蔵のおもてもうもれ　参議雅経
跡人のかり初のよもやうもれん　俊成卿女
跡人の庭よりほかの梅の枝　従二位家隆
跡人のおもかけ残るねやの月　入道前関白太政大臣
跡人の下庭もふりに　参議雅経
跡人の年月ハてり添りそれ　法眼宴覚
跡人すさまじくれゆくれの雨　永福門院
跡人とる年なれなれ　俊成卿女

風 雑上 / 風 秋上 / 新千 夏 / 新拾 冬 / 新続古 夏 / 風 雑中 / 風 雑中 / 風 雑上 / 新拾 秋上 / 新拾 秋上 / 新続古 賀 / 風 雑上

妹風よふきな乱しそ山の端と　前大僧正慈円
吹乱てなをうつくしき夕風　院小弁
うすくもりしのをつかてそ　前大僧正慈円
過ゆくそれ者とて名乗　小侍従
さくらかりをしのとやなし　院小弁
なをとまらぬ雲の夕風　西園寺内侍
朝日さすみをの川の春霞　従二位為子
跡のまやわすれてあまる　権中納言公経
うつりゆく夕へのそらを　参議雅経
夏の大宮人のさくらかり　参議雅経
なをへて花の松つゝく　権中納言公雄
かくて津国のみなとの　前大僧正慈円

彩拾遺 雑上
うき世をすてゝうくるとそ捨ても
なをのがれぬ山のかけかな 遍昭僧正
彩後古 恋三
なにはえもいはぬことのはかけて
いかにせんとかいひしらすして 素性法師
新拾 春
ほのかにも名をしるせとや梅の花
匂ひをそへて折てやるへき 隆信朝臣母
新千 恋二
あれはかり人のこゝろを見しま
に月日のかはるものにそありける 伝照念院尼
彩拾遺 秋下
ふるさとは月のみかはりて
もとの人もなしとよめりけん 西行法師
彩後古 恋二
物思へは人こゝろをもしらぬ
ものとやそらにうきまくらとる 二品法親王覚雲
新後古 恋二
忘草かきもしらしな恋ひわひ
ぬるかのかれをとなるものと 同法師
風 恋一
梅花まつ香をかけて鶯の
なきてうつろふ春の山里 権大納言実教
新拾 恋五
狩人のふみわけてとふもあり
もあらぬもあるなかの道 後鳥羽院
彩千 秋上
吹かへす秋の山風うちしめり
日影のこれる夕暮の雲 後嵯峨院
彩後古 恋四
いつまでかつれなかるへき
ながらへてみてもものをや思ふと 同
風 秋下
今こそあれ老の涙の袖の露
玉とやいはん袂とやいはん 後嵯峨院
彩千 恋三
立ちわかれいなばの山の峰に
おふるまつとしきかは今かへりこん 中納言行平
彩後古 恋一
いつまでかつれなかるへき
ながらへてみてもものをや思ふと 同
彩拾 恋四
こひわひぬ泣くねをたにもらすまし
名こそ朽ちなめ人しつますは 九条左大臣女
新千 恋五
思ひ出てしのぶ袖にもあまるかな
昔を恨むなみだなりとも 後鳥羽院
風 恋五
ながらへてかゝるためしを見るよりも
まつ世の人ぞ恨めしきかな 後嵯峨院
彩千 恋五
ながらへてかゝるためしを見るよりも
まつ世の人ぞ恨めしきかな 後嵯峨院

新千
天

わっかあれろこ吸さまま新ち
新拾
天

若乃水茎の筆とものいさて
新千
天

数々の詞乃変川ち舟
新拾抄
天

誰よ又こうこんわやれ
新千
天

雨風と辛氏そやろこん
日
天

うれこいろてれ海よ心いへ
日
天

拾そて露れ林乃わみや
日
天

のやれ乃よこうまめ
日
天

眺うまてよりれこと果を
新拾抄
秋上
日
歌上

草乃末よ氏てみえ雨風と
新拾抄
秋上
風
文

のかにみうタくれの雨
永和二年
東百首

のかにみうタくれの雨
信仁家隆
信仁家隆

のうく山れおくのねを
拾遺抄
秋部

風
歌下

山めくめとかくてて世事と
新拾抄
歌下

くてるくと世の紅事をかれる
新後古
歌下

むくらめるめとれてやう紅事の
風
秋中

心そやすしぬれ在事と
新後古
歌中

久をのむしもやれとそえん
新拾抄
歌上

川ろの心乃うれかれは
風
系三

うれめも衣れてよれて
新拾抄
歌下

忘れて世とそてくよれる
新後古
今

又しそ之映とと忘てきしか
新拾
歌下物

山さくハ姫を打かり乃ちく
新拾抄
歌雑

の雨かる川八の代ろ也
風
雑中

少くるくやうれ渕乃う寺少
あさみとそれ忘てもまる

のれそれおい公なるる
寂恵家集

のれみ花の為へのけて
物重合

のれぬまふ世そもん
森原堂池

のれ月みくう梨
安後法書

のれて山のかくもしそ
源和氏

のれてうこう今の
拾遺抄

のれ梨けるめよ
院一条

のれて氏て数のみを
美定門師

のそれ乃こかくめて
続拾遺集

の雨かる川八の代ろ也
皇太后宮大夫俊成

のそしみり世そもれ
源和義私百

のるくまそ氏ろ
五百首

新後古冬　なるあや冬里ふる人乃設さして　順徳院御製

新拾遺冬　こうそそみてもしもまねくつる　源義将朝臣

同雑春　夜草ハ敷くそふるふるふる水ふし　恭安門院御歌

風雅　庭よ梅一気よ神をかな〇て　按納言為藤

新続古今　ねりみなさんよとよしるを　恭安門院御歌

日ふ下　いつつにいろ一枚しなるあり　和泉式部

新千交　天川雲れみおれ月をそ　為頼朝臣

新続古今　かそふれ秋を八十乃翁如　雄舜法師

新拾ふ下　なれきつふ人をそ冥世中ま　按九条前内大臣

新後古今　きてみそきふいそつやよ桜　教長卿信経朝臣

風ふ下　風三乃やふ山ハまれ　按察流宗尹

風雅　吹めふ称えハまふみて　為定流為重朝臣

風ふ上　雲風よ下月のそふ数みて　按察家隆

風雅　妙人乃そ松ハ雪ハ　按心院関白

新後古今　ふふそ松ハ雪ハ　源頼春

風雅　三乃ふめ乃庭を雨れ山乃ふ　為定流為冬朝臣

新後古今　老ハそうたきよふひそそと　源有長朝臣

日　たのしへき来乃庭をれて　前参議為親

新拾遺　あれそふ人をそふなて　新院御製

日　ふふそ松ハ雪ハ　按心院関白

新後古今　ふふそ松ハ雪ハ　源頼春

新拾遺　ふふそ松ハ雪ハ　按察家隆

新後古今　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為冬朝臣

新拾遺　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為重朝臣

新後古今　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為冬朝臣

新拾遺　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為重朝臣

新後古今　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為冬朝臣

新拾遺　ふふそ松ハ雪ハ　為定流為重朝臣

新後古 冬　風もしを歌さえて寒さそうなよ
新於 雑中　ふるて都へ帰る雪見れそめ
新後古 秋下　なる紅葉ふるの月をみ芙蓉
新拾秋 冬　すすきおもうれ打ちしれて
新拾 雑上　寄るもまるこれを九原ふるも
風 雑下　なみてそりくれ来ふりて
風 雑中　松風や吹くる松原さえて
新千 雑下　七十九ふるてそなるみれを
日 雑下　音無川あるふるれ消えぬ
新拾秋 恋三　かな見そこいるぬうれ浜
新拾秋 雑三　なる松ふるさく花の月
日 冬　人なくれゆくまうふるとに

ふるとうて芦村立　拾玉納て遍照
ふるまするれ村雨れ　寺子内親王
ふる雪くれそるみさ　従三位経親
ふるまかくれ我ひれ　通命法師
ふるまみにつくるる　花厚恵後
ふるまみう姫れ度　西園寺公名
ふるてつる宿成君　拾入納て宣明
野沢ふるかれ水　拾西園寺公名
野沢の水も姫そうき　拾玉納て権僧
水鶏ふるくれの夜　後宇多院女
形鶏ふるまれ　花厚恵後

風 冬　雑波る入合にさしまれ
風 雑上　新よりき夕日れうかる
風 秋上　妹ふるこ花ふるる
新千 雑中　ふるまかくれ我ひれ
風 雑下　なれ心しれ消えぬ
新千 恋　代をれ君ふるれ
新拾秋 雑秋　代ふるる庭ふるる
日 交　旦くれそれふるれ
新後古 ふるまそれ友そうや
風 秋上　鳴れ井あるれ
風 雑上　ふる花ふるれ
新拾秋 冬　形鶏ふるまれ

新後古 巻上
新千 文
新後古 巻上
新千 雑上
新千 雑上
風 雑中
新千 雑上
風 雑中
新後古 雑中
新後古 雑下
風 雑中
新後古 雑中
新続古 雑上
新続古 雑上

これもこの人ぞとひとつ枕かな
うち寄りてやすらひやすらん
をとめごがあまり梅が下を
秋ぞとて人をも雁のこゑのみは
ふるとて更けゆく秋を
羽をならべてうち馴れし一夜かな
かすめる山にうつりてくる雁
松のこずゑや霞むらん
をち里人の山もと霞む
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁の山より来ては
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁が帰る空かな

新後古 巻上
新千 文
新後古 巻上
新千 雑上
新千 雑上
風 雑中
新千 雑上
風 雑中
新後古 雑中
新後古 雑下
風 雑中
新後古 雑中
新続古 雑上
新続古 雑上

これも昔人ぞとひとつ枕かな
うち寄りてやすらひやすらん
をとめごがあまり梅が下を
秋ぞとて人をも雁のこゑのみは
ふるとて更けゆく秋を
羽をならべてうち馴れし一夜かな
かすめる山にうつりてくる雁
松のこずゑや霞むらん
をち里人の山もと霞む
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁の山より来ては
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁が帰る空かな

新後古 巻上
新千 文
新後古 巻上
新千 雑上
新千 雑上
風 雑中
新千 雑上
風 雑中
新後古 雑中
新後古 雑下
風 雑中
新後古 雑中
新続古 雑上
新続古 雑上

これも昔人ぞとひとつ枕かな
うち寄りてやすらひやすらん
をとめごがあまり梅が下を
秋ぞとて人をも雁のこゑのみは
ふるとて更けゆく秋を
羽をならべてうち馴れし一夜かな
かすめる山にうつりてくる雁
松のこずゑや霞むらん
をち里人の山もと霞む
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁の山より来ては
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁が帰る空かな

新後古 巻上
新千 文
新後古 巻上
新千 雑上
新千 雑上
風 雑中
新千 雑上
風 雑中
新後古 雑中
新後古 雑下
風 雑中
新後古 雑中
新続古 雑上
新続古 雑上

これも昔人ぞとひとつ枕かな
うち寄りてやすらひやすらん
をとめごがあまり梅が下を
秋ぞとて人をも雁のこゑのみは
ふるとて更けゆく秋を
羽をならべてうち馴れし一夜かな
かすめる山にうつりてくる雁
松のこずゑや霞むらん
をち里人の山もと霞む
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁の山より来ては
なく雁の声ぞ聞ゆる
なく雁が帰る空かな

新拾玖

今月白ふるえだしてのきやうき

日暮

玉もうそ海をうてゑやまれ

新後拾冬

雲いろよこまれあらしそよそよして

新千秋下

史氏拾を庵乃やうにうもり

百五十九そ

新拾玖

新後拾冬

新千秋下

新後拾冬

新千秋下

新後拾冬

新千秋下

新千 亜ム
津の国なにわの春の風ふけば
むめが香ごとに匂ふ袖かな
新千 新中
九重のうてなに立てよ春霞
新下
見わたせば柳桜をこきまぜて
新千 雑下
都ぞ春の錦なりける
彩千 雑下
ふるさとは吉野の山しちかければ
彩千 新下
花の便りを人のこぬらん
彩千 新下
白雪のふりかかるかと見るまでに
彩千 新下
吉野の里に花ぞ散りける
彩千 新下
袖ひぢて結びし水のこほれるを
彩千 物名
春立つけふの風ぞ吹きける
彩拾 新中
神なれば今もみ山の桜花
彩友 拾
栄えむことは疑ひもなし
新続古 新中
君が世をいはふ今日こそ鶯の
鳳 新下
百代までにと鳴きはじめけれ
彩千 物名
春霞たなびきにけり久方の
彩拾 新中
月の桂も今や咲くらむ
新続古 新中
ひさかたの月の桂も折りてけり
鳳 新下
我が宿にこそ植ゑて見まほしき
彩千 新下
梅が香を袖に移してとどめては
新千 雑下
百代の後の春をしのばむ
新続古 新中
梅の花匂ひを添へて春雨の
彩千 新下
降るは涙か鶯の鳴く
彩拾 新下
梅が香を風のたよりに包みこせ
新千 亜ム
我が住む宿の垣根とおもふに
新千 新中
梅の花たが袖ふれし匂ひぞと
新千 新下
思ひ出でても恋しかるらむ
彩千 雑下
梅の花匂ひを袖に留めては
彩拾 新中
春は我が身の移り香とせむ
新続古 新中
梅の花匂ひを袖に留めては
鳳 新下
春は我が身の移り香とせむ

むめが香ごとに匂ふ袖かな　後鳥羽院御製
九重のうてなに立てよ春霞　関白前太政大臣
見わたせば柳桜をこきまぜて　前大納言実教
都ぞ春の錦なりける　前中納言雅孝
白雪のふりかかるかと見るまでに　平政村朝臣
吉野の里に花ぞ散りける　後京極摂政前太政大臣
袖ひぢて結びし水のこほれるを　権大納言公雄
春立つけふの風ぞ吹きける　後光明照院関白太政大臣
神なれば今もみ山の桜花　西行法師
栄えむことは疑ひもなし　源頼政朝臣
君が世をいはふ今日こそ鶯の　後鳥羽院御製
百代までにと鳴きはじめけれ
ひさかたの月の桂も折りてけり　権中納言公雄
我が宿にこそ植ゑて見まほしき
梅が香を袖に移してとどめては　後京極摂政前太政大臣
百代の後の春をしのばむ
梅の花匂ひを添へて春雨の　権大納言公雄
降るは涙か鶯の鳴く
梅が香を風のたよりに包みこせ　後京極摂政前太政大臣
我が住む宿の垣根とおもふに
梅の花たが袖ふれし匂ひぞと　後京極摂政前太政大臣
思ひ出でても恋しかるらむ
梅の花匂ひを袖に留めては　権中納言公雄
春は我が身の移り香とせむ
梅の花匂ひを袖に留めては　後京極摂政前太政大臣
春は我が身の移り香とせむ

新続古 雑下
別れ月やどりし袖のなつかしき
彩拾 雑下
春の夜の夢の浮橋とだえして
鳳 冬
峰に別るる横雲の空
新千 雑下
吉野山花の白雪ふみわけて
新続古 雑中
入りにし人の跡ぞこひしき
彩千 夏
ほととぎす鳴きつる方をながむれば
新千 雑下
ただ有明の月ぞ残れる
彩拾 冬下
冬ながら空より雪の降るごとく
新続古 冬
木の葉のみ残る梢と思ふまに
新千 雑下
いづくより来し雪の白さぞ
彩千 夏
ほととぎす鳴きつる声のしたはまだ
新拾 雑下
木の葉のみ残る梢かな
彩拾 春下
春雨の降るは涙か鶯の
新続古 雑中
鳴く音に濡れて花の散るらむ
彩千 夏
ほととぎす鳴きつる方をながむれば
鳳 雑下
ただ有明の月ぞ残れる
彩拾 春下
春雨の降るは涙か鶯の
新続古 冬
鳴く音に濡れて花の散るらむ
新千 雑下
吉野山花の白雪ふみわけて
新拾 雑下
入りにし人の跡ぞこひしき
彩拾 春下
春の夜の夢の浮橋とだえして
新続古 雑中
峰に別るる横雲の空

別れ月やどりし袖のなつかしき　雅家卿
春の夜の夢の浮橋とだえして　法眼宗深
峰に別るる横雲の空　権中納言公雄
吉野山花の白雪ふみわけて　後京極摂政前太政大臣
入りにし人の跡ぞこひしき
ほととぎす鳴きつる方をながむれば　後京極摂政前太政大臣
ただ有明の月ぞ残れる
冬ながら空より雪の降るごとく　後京極摂政前太政大臣
木の葉のみ残る梢と思ふまに　後京極摂政前太政大臣
いづくより来し雪の白さぞ　後京極摂政前太政大臣
ほととぎす鳴きつる声のしたはまだ　後京極摂政前太政大臣
木の葉のみ残る梢かな　後京極摂政前太政大臣
春雨の降るは涙か鶯の　後京極摂政前太政大臣
鳴く音に濡れて花の散るらむ　後京極摂政前太政大臣
ほととぎす鳴きつる方をながむれば　後京極摂政前太政大臣
ただ有明の月ぞ残れる　後京極摂政前太政大臣
春雨の降るは涙か鶯の　後京極摂政前太政大臣
鳴く音に濡れて花の散るらむ　後京極摂政前太政大臣
吉野山花の白雪ふみわけて　後京極摂政前太政大臣
入りにし人の跡ぞこひしき　後京極摂政前太政大臣
春の夜の夢の浮橋とだえして　後京極摂政前太政大臣
峰に別るる横雲の空　後京極摂政前太政大臣

彩千 五一　をやあまよ　紀行春
新千 五二　清ろ行末も　法皇
風 雑中　みち思ふ　御命の
新よ 秋上　吹て梢　はし暁や
新拾 秋上　嵐を月も　らの
風 秋下　まで松風　後鳥羽院御製
新千 羇　こりもしてぬく　貞応二年
風 秋下　ふく方空を　入道二条院讃岐
新千 夏　都こいやわこ里　永福門院
新続古 夏　夕雲低涼　前内大臣
新続古 夏　都之やれつま　後二条院御製
新続古 夏　まさる萩の下葉に　按察局
新続古 五三　いこみさりてせめる　日吉

新続古 五三　ぬ里法しるへうこんのそ　紀行春
風 秋中　むれ雲なく　法皇
新よ 冬　うり行やまの日影照　御製
彩拾 雑上　嵐を立つり　後二条院御製
彩拾 冬　山風よ　按察局
新続古 五二　彩ら紅葉　後二条院御製
彩千 羇　紅々日ごろ　按察局
彩千 五三　ふるさとも　雅孝
新千 羇　方とてんな世　後二条院御製
新続古 五二　方とれ名そうそれ川世　禅住法師
彩千 羇　廻りあふて月　守内親王
彩千 羇　里松折　按照会院
新千 羇　いこ松原　後二条院
　　　　深知行　家久法師

彩拾秋下　さゝがにの蜘蛛のまよひのいとかゝる山
彩拾霜　なかなかに死なば安けむ君に依り思ひ乱れて寝ぬ夜ぞ多き
彩拾夏　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
彩拾上　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
新拾拾雑秋　夕闇は道たづたづし月待ちて行ませ我が背子その間にも
新拾旅　家人の斎へ待つらむ我が背子は何処の山辺に宿りかしたる
新続古霧　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
風上　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
彩千上　我が袖に降りおく霜を払ひつゝ君待つ時間の久しくもあるか
彩拾上　朝明の霧の八重立ち隔てなば妹が心し我れ尋ねかねむ
彩千上　君が行く道の長手を繰り畳べ焼き滅ぼさむ天の火もがも
彩拾上　我が背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ妹寒らむ
新続古　かくのみにありけるものを猪名川の奥を深めて我が思へりける
風上　二月の望の風さむし神風の伊勢の乙女し思ほゆるかも
彩千秋雑　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
風上　人言を繁みこちたみおのが世にいまだ渡らぬ朝川渡る
彩拾上　我が背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ妹寒らむ
新続古上　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
彩千上　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
風三一　久方の天の原より生れ来て妹を相見つ夢かこれ現か
彩千上　思ふにし余りてなにか大夫の男子の中に我が名し惜しも
彩千上　ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿し見えなくに
彩千旅上　雑雲の行き通ふ天路をも吾は尋ねむ君し坐さずは

むさし野原　後二位家隆
むさし野原　菅原行春
むさし野原　よもの人みな
むさし野原　前中納言定家
むさし野原　参議長綱
むさし野原　三条住前大納言
むさし野原　参議長秀
むさし野原　源朝臣
むさし野原　伏見院御宸筆
むさし野原　法印宗誉
むさし野原　菅原為長朝臣
むさし野原　従二位為子
むさし野原　従二位為子
むさし野原　従二位為子

新拾遺　春上　本号しらず　ふる雪の　みねの白玉　あらはれて　春にしられぬ　朝ぼらけかな　ひめの上
新後拾遺　春上　名もしるし　なにおふ春の　ものとてや　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　いまよりは　神もむかしの　ためしとや　ふりにし跡を　あらためつらん　ひめの上
新後拾遺　春上　神よりも　ゆづりをうけて　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　春をまつ　心ぞかすむ　ふるさとの　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　神よりも　ゆづりをうけて　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　春をまつ　心ぞかすむ　ふるさとの　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　いまよりは　神もむかしの　ためしとや　ふりにし跡を　あらためつらん　ひめの上
新後拾遺　春上　名もしるし　なにおふ春の　ものとてや　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　本号しらず　ふる雪の　みねの白玉　あらはれて　春にしられぬ　朝ぼらけかな　ひめの上

新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
風　春上　降りつもる　雪も春とや　うぐひすの　なくこゑにこそ　ひめの上
風　雑秋　おのづから　花もあるべき　ものなれや　ふるさとの　ひめの上
風　秋中　ふるさとも　ほどもへだてず　ながむれば　ひめの上
新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
風　春上　降りつもる　雪も春とや　うぐひすの　なくこゑにこそ　ひめの上
風　雑秋　おのづから　花もあるべき　ものなれや　ふるさとの　ひめの上
新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上

新後拾遺　春上　名もしるし　なにおふ春の　ものとてや　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　いまよりは　神もむかしの　ためしとや　ふりにし跡を　あらためつらん　ひめの上
新後拾遺　春上　神よりも　ゆづりをうけて　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　春をまつ　心ぞかすむ　ふるさとの　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　神よりも　ゆづりをうけて　ふるさとの　春をばわれぞ　しるべかりける　ひめの上
新後拾遺　春上　春をまつ　心ぞかすむ　ふるさとの　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　いまよりは　神もむかしの　ためしとや　ふりにし跡を　あらためつらん　ひめの上
新後拾遺　春上　名もしるし　なにおふ春の　ものとてや　雪のしたにも　若菜つむらん　ひめの上
新後拾遺　春上　本号しらず　ふる雪の　みねの白玉　あらはれて　春にしられぬ　朝ぼらけかな　ひめの上

新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
風　春上　降りつもる　雪も春とや　うぐひすの　なくこゑにこそ　ひめの上
風　雑秋　おのづから　花もあるべき　ものなれや　ふるさとの　ひめの上
風　秋中　ふるさとも　ほどもへだてず　ながむれば　ひめの上
新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
風　春上　降りつもる　雪も春とや　うぐひすの　なくこゑにこそ　ひめの上
風　雑秋　おのづから　花もあるべき　ものなれや　ふるさとの　ひめの上
新千　秋下　初雁の　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上
新拾　秋下　秋ごとに　なきわたるかと　聞くほどに　ふけゆく月の　ひめの上

新千　雑上　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上　伏人院出家
新後拾遺　雑上　今上御製　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新後拾遺　雑上　武智部親者　歌を　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新後拾遺　雑上　等持院殿　おはしまし　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新後拾遺　雑上　萩中納言　家歌合　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新後拾遺　雑上　尋徳上師　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
風　雑上　伏人院出家　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新拾　秋下　伏人院出家　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新千　秋下　後鳥羽院　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は　ひめの上
新拾　秋下　後鳥羽院　ひさかたの　雲のうへにて　見る月は

新千雑上
新拾巻一
彩千巻八
彩拾秋上
新千巻一
風巻三
新拾巻一
彩続巻三
新続古巻心
彩千巻三
新千巻二
新続古巻冬

新続古
夏
風
夏
風
雑中
彩続古
秋上
彩拾巻冬
彩千巻冬
彩千
秋上
彩続古
巻一
新千
巻冬
新拾
巻冬
新千
巻冬
彩拾
羇

百卅五首

彰後拾秋上　まつ人のこゝろ変れ夜て宿次

新拾立二　いそて来るうま月をそ待つ

彰千冬　橋姫のうちとよみしさ過て本葉ろく

新指春上　橋姫の袖の朝霜をさそて寒しき

彰後拾春上　橋姫の底の衣ぬるこそすくなけれ

彰後拾雑秋　こほりもつかて網代木よ

同秋中　雪晴るうちの山もこゝろ

新千冬　橋姫のうち払ふ嵐とともに

彰後拾冬　網代木をうつ氷小夜千鳥

彰後拾冬　橋姫のころもうつ砧

彰後拾春上　ものおもふ心もしらん

彰後拾秋下　てぬる人のあさ日

彰後拾秋下　うつの橋姫

彰後拾雑秋　夢後雲絶

同秋下　夢をうつ

新千羇　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

新後拾雑上　夢をうつ

彰後拾雑上　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

彰後拾秋上　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

新後拾雑上　夢をうつ

同秋下　夢をうつ

彰後拾雑上　夢をうつ

新千羇　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

彰後拾秋上　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

彰後拾雑上　夢をうつ

同秋下　夢をうつ

新千羇　夢をうつ

新千秋下　夢をうつ

新後拾冬　夢をうつ

彰松 巻二
新松 巻三
彰千 雑下
新拾 巻十
彰続古 春下
風 旅中
彰拾 雑上
新拾 冬
新千 巻二
彰続古 巻二
新続古 誹諧
彰拾遺 巻二

[illegible]ん遠[illegible]となく[illegible]開ちかい地を
[illegible]ふく[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

風 五二
風 林城
彰千 五三
風 秋下
風 秋甲
風 支
彰千 秋下
彰拾 五上
彰續 五二
新拾 秋下
風 五五
新拾 五心

風 五上
彰拾 五心
彰拾 尺
新續 雜上
彰續 五上
彰拾 就上
新拾 五下
風 尺
風 雜下
彰 尺
風 五一
風 雜下

新千 巫二
新千 巫三
新拾 巫二
新続古 袋
風 尺教
新千 誹下
新拾 巫心
新千 尺
新続古 文
新千 巫心
新続古 誹下
新続古 巫心

巫ことを聞きて
名月の比は雲よりそこ
巫てさそはれてねる秋の夜
うとみつうの雲さやうやうの秋の雲
ちるみこ巫の秋の雲
額こそ巫のそ雲かとたれをさしもよるふ
逢こと雲成す一夜の
七夕のそらみかく雲そ
都こそ流よかく初雪
雲ゆく雲うかいつまでも
さめやすく雲こそ雪
作こそ朝の流れ浪

風 秋中
風 秋中
新千 秋上
新千 誹上
新千 秋上
新千 誹上
新続古 羇
新続古 誹上
新拾 秋上
新続古 誹中
新拾 冬
風 文
新千 巻上

うち振こそ
行くく山田の
浅茅生のもの
浪まれ里
霞ありとの人の
霞ありの文城の
葛のをいく風
浪まれ
雪のくれ
雪松よりそ
雪のの
雪のの

うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪
うつる雪

素性法師
紀貫之
素性法師
菅原道真
慶政上人
源重之
藤原雅有
源頼之朝臣
常盤井入道
前参議
藤原俊成
前大納言
藤原定家
前大納言
藤原為家
前大納言
藤原家隆
前大納言
藤原為家

新拾 雑上
彰拾 冬
新千 羇
彰拾 旅
彰続 羇
拾 羇
彰続 冬
彰千 秋下
新千 秋下
新千 秋下
彰千 秋下
新千 雑上

うつし白雲
うつむ白雲
うつり山越
うつり山越
うつり山通
うつり山越
うつり山越
うつり山越
うつり山越
うつり山越

蓑笠の雪
源義持朝臣
第六領して
忠良
萩原政宗
法下宗親
法下定国
源義春朝臣
照慶院泉
民部卿
持儀忠良朝臣
法下浄弁
会計院集

新拾 秋下
彰拾 秋下
彰拾 秋下
彰拾 秋下
彰続 秋下
彰拾 秋下
彰続 秋下
風 春上
風 冬
彰拾 春
新千 春上
彰千 秋下

あくる月ごとの
秋深き月の秋しおもひ
今日の雪ふこりまさる
よしの山ふもとの月あけて
月影とよそふ雪の
長秋の月の明を
ふるあきの雪
霞とあらそふ雪
雪やあらぬ
昔みよしの
雪にて二葉の松
末ながくいはひそめつる

うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁
うつり雁

第六領して
中納言為家
権中納言経実
宮内卿院雅有朝臣
儀同三司
前内大臣
第六領忠良
従二位
中納言為家
院御所
如円法師
大納言公実
非蔵人信濃

彰仁校訂
新古今
巻下
風雅
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

無つゝれ橋もむすこれ神の
庵ならし後あれ小野の雪
吉野山峯の白雪ふみわけて
入りにし人の音もせぬかな
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

柿葉もうつろひ行く神山の
みちこそなけれ時雨ふる
らし
かきくもり雪も降りぬと
思ふまに
こゝろの内の物ともあまた
こゝろの家居もいく重
うづもれぬ
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

さゝの葉もそよぐばかりに
降る雪の
又ふりかはる年の暮かな
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

津の国の
うたてこの
うちとけて
うちとけそむる
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

人
もとへ
常中納言
匡房
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恨
もとへ
前権大納言
為家
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恋
もとへ
権大納言
公雄
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恋
もとへ
従二位
為子
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恋
もとへ
権大納言
公雄
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恋
もとへ
従二位
為子
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

恋
もとへ
前関白
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

我こゝろ人に
もとへ
権大納言
公雄
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

あの海の
もとへ
従二位
為子
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

那波の
もとへ
常中納言
実明
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

那波なる
もとへ
権中納言
為重
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

あまの
もとへ
従二位
為子
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

あるかなきの
もとへ
権中納言
為重
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

那波
もとへ
権中納言
雅世
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

歌浦
もとへ
中務宮
憲
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

うらやまし
もとへ
権大納言
実世
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

月影や
もとへ
後二位
為定
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

あれのこゝろを
もとへ
権大納言
公雄
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

長閑
もとへ
前関白
太政大臣
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

権中納言
為重
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

里
もとへ
権中納言
雅世
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

中務宮
憲
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

権大納言
実世
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

後二位
為定
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

権大納言
公雄
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

三条院
御百首
うちとけて
うちとけそめし
風
新上
彰須賀
今
彰千
巻
風
林葉
彰千
今
風
新上
風
雅中
彰千
巻上
彰千
巻一
彰千
巻六

春雑歌

彰義々　風吹成就
新後拾立二　急いそきのこまわくらに
彰後拾雑中　難波つ入江の蓮ちぎり
彰後拾雑中　おくれ風吹よ海女の
風立三　袂の匂ふ
彰千雑上　程のそ遠き
彰後拾々　紀の海わたる
彰後拾雑中　今日こゆ塩路の
新後拾秋下　永こもる
風雑中　澪標
彰後拾雑上　をしほ
彰後拾秋上　次のあま

うら風吹　祝ひ成就
うら風吹　急いそきのこまわくらに
うら風吹　難波つ入江の蓮ちぎり
うら風吹　おくれ風吹よ海女の
うらみつる　袂の匂ふ
うらみつる　程のそ遠き
うらみつる　紀の海わたる
うらみつる　今日こゆ塩路の
うらみつる　永こもる
うらみつる　澪標
うらみつる　をしほ
うらみつる　次のあま

風秋上　大ぐしも四の拾しらの
彰後拾雑　ものはかなくうちなびく
彰後拾立三　袂しぼりし
彰後拾立五　なにはなる
彰後拾立六　方々に
彰後拾雑下　別る身の
彰千雑中　袂の氷
彰後拾立六　作とて
彰後拾立六　うら離れ
彰千立五　うら離れ
彰後拾立三　うら離れ
彰後拾立二　さ衣の

うらやまれ　祝ひ成就
うらやまれ　急いそきのこまわくらに
うらやまれ　難波つ入江の蓮ちぎり
うらやまれ　おくれ風吹よ海女の
うらやまれ　袂の匂ふ
うらやまれ　程のそ遠き
うらやまれ　紀の海わたる
うらやまれ　今日こゆ塩路の
うらやまれ　永こもる
うらやまれ　澪標
うらやまれ　をしほ
うらやまれ　次のあま

大ぐしも四の拾しらの
ものはかなくうちなびく
袂しぼりし
なにはなる
方々に
別る身の
袂の氷
作とて
うら離れ
うら離れ
うら離れ
うら離れ
さ衣の

うらやまれ　祝ひ成就
仮初契る
旅人の
歌合の
入道前一本
契りを
第十一番
左勝
第右近衛
礼紙
第六番
果守
後二条院
御製
後二条院
御製
権僧正
雅有

彰は拾五二
彰千五ム
彰拾五ム
新千拾下
新千五ム
彰千拾上
彰は拾拾下
新は拾六
彰は拾就秋
彰千五九
新拾七下
彰千五ム

仍つの葉ミ子とも手まに
まれてを堂ん〻ろう里〻
とゆのあまの塩や礼教ふれてそ
哥ふしめくいろ〻ふきまるく
うつてもふれ面哥のとろめ〻
天川一秋〻りのあ風ろはる神
長秋たてるをあわきまて
都ところの和ろなるめ
一秋るも契てなて七夕〻う
いま女てなるもこう公守れ
面哥のいろもミて風ろ
ミて里ふれ〻う契ま〻松神
となるを

彰拾五五
彰千五ム
彰拾五ム
彰は拾就秋
彰は拾七
彰千五ム
彰拾就中
彰は拾六
彰は拾七
彰千五ム

とゝなるつゆもうしたをさわれ
はりしたてのまて契てあ
ミれふるの葉のく中くふ
ふ〻ゆるのんとき河海月
こゑ〻ろをもミろ後の雪風
拾てなり〻てく女ゆ
ミるふくまふ〻ふ山ほくおと
明ゆ里とゝあるてを物ふれ
ひるゝをあるる日を一百もの雪ふれ
ふれ〻ろ雪ふ〻ふ〻ふ
考〻てを松〻ふ風をて
ミるる朝を雪をふ雪ふ〻て

彰千拾上
彰千五ム
彰拾五ム
新千拾下
新千五ム
彰千拾上
彰は拾拾下
新は拾六
彰は拾就秋
彰千五九
新拾七下
彰千五ム

うゝふるふ 京還法師
うゝ〻う〻う 前参議雅有
うゝ〻ゆ〻ろ 藤四郎今
うゝふれ〻ん 松四郎今
うゝふれ〻ん 前中納言
うゝぬ〻ゆ〻あ 権中納言
うゝふゆを 権寒夜
うゝふれ〻ん 忠岑
うゝわ〻す 参議資衡
うゝふ〻ふ〻ふ 紀友則
うゝみ〻ゆ〻ろ 前関白
うゝふ〻ふ 大江為元

彰拾五五
彰千五ム
彰拾五ム
彰は拾就秋
彰は拾七
彰千五ム
彰拾就中
彰は拾六
彰は拾七
彰千五ム

うゝふるふ 前中納言
うゝ〻う〻う 参議為相
うゝふれ〻ん 前関白
うゝふれ〻ん 二条院讃岐
うゝふゆを 源重之
うゝふれ〻ん 大江為基
うゝふ〻ふ〻ふ 前大納言
うゝふ〻ふ 大江為房
うゝふ〻ふ 前関白
うゝふ〻ふ 民部卿
うゝふ〻ふ 権大納言

谷のうぐひす鳴のこるねざめを
梅の花ちるまでかすむ軒の竹
うぐひすも春をわするゝ花の雪
竹の秋そよやうき世の風ならば
漏ぬれどのきの玉水ぬるゝ袖
まがき咲色香みてうぐひすの
梅のもと木の下人の相合まで
梅の花さそふ山人ありあけの
言ふるもの梅ぞ匂ひ残れる
おほつかな誰ぞ夕暮梅の花
玄鳥ぞ古巣の梅にうぐひすの

うぐひすの声
うぐひすも
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの
うぐひすの

巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家

心せよ花物語ある御垣守
関ぢをいづれも人や越ぬらん
六十九代の春の数ふる
梅ぞまづ花ぞ匂ひて人ごころ
梅ぞまづ花ぞ匂ひて人ごころ
生てもの物うきわれの名ばかり
のどかなる春ぞ恨ぬ物ぞうき
みぶの人のうゑそめしまゝの
それ竹のうき世のまもるものぞ
唐土の代々の流をくみてしる
さゝをさる北海を遠く潜んと

うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声
うぐひすの声

巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家
巻末作家

彰続古 跡活
彰続古 友
風 巻四
風 巻四
彰於 表
彰於 巻三
風 巻五
風 巻四
風 巻四
彰千 表
風 巻三
彰千 巻五

おく雪をはらふ人の木のもとにまつ
かぶ雪をかぶるてふ大井川月
さえわたる夜を月をいとふ人の
雪かとのみもみぢ葉の散のこれる
なる路の三千あまりもなをせまじ
旧しへまでよの末うたがふ菊
なかくは千歳かうぬ花
盛りをいくそたびかへりてもとの
ふるさとの春の雨のしめやかに降
ほととぎす聞くそのふるさとの
おぼつかなうたてもたなびく
行く春をとまれかくまれ
うぐひすの

彰千 巻五
彰於 巻三
彰千 巻四
彰千 巻二
彰於 春上
彰続古 雑中
彰千 巻三
彰於 雑中
新千 雑下
彰於 表
彰千 雑下

割江乃為りをみてや
思ふをは人の行方にいとどしく
逢まてしのぶさわもるこの世のむろの
きゝあへぬ涙や袖にしぐるらむ
おもふ方こそ
いく世をあしたの雲の
いかにかを結ぶ人とは一つ
心をまた往人のあるかぎり
答へたる歌の一ふしを
あはれとも思ふ人のあらばこそ
朝ごとにこゝにゆくあの表
をこゝまでよまでをとゝ

第六類 仮名
第六類 仮名 女
第中類 隆長
牡蠣江所
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔
従二位為信
第六類 為忠
第二類 仮名
清原元輔

新千
雑下
新拾
雑下
風
雑下
新玖
雑中
新拾
雑上
新千
雑下
風
雑下
新続古
雑中
新拾
雑上
新拾
冬
新拾
恋二
新千
恋三

拾てこう行れ心ぞ入江寒き
こがくれみわ歌人のそれも舟の
置つゝそしつこも丁人き方をき
いなをやまとつまそて思ひくこ
そるゝく更さていくほの思もて
かそあれいう地もをぬそのこや
山深くすまゐかなる小
あるのとゝにほりる小
そうをもうこれをそうれ
のれ深山の方ゐ井くよさ
のうんをうんこまも
あるのとゝにほりる小
そうをもうこれをそうれ
こうにかうより物とつゝて

うき世なり
読人不知
うき世なん
関白前左大臣
うき世なん
通昌法師
うき世なん
読人不知
うき世なん
従二位有忠
うき世なん
都方門院
うき世なん
読人不知
うき世なん
当道行範

業平朝臣
読人不知
関白前左大臣
小野
通昌法師
読人不知
従二位有忠
藤原基俊
浄妙上人
藤原康行
都方門院
藤原
読人不知
当道行範

新千
恋三
新拾
恋三
新続古
雑上
新拾
恋一
新続古
恋二
新拾
恋一
新続古
恋心
新千
恋二
新拾
恋一
新続古
恋二
新続古
雑上
風
冬
風
秋下
風
雑上

約ちかりつゝ今
いつそれをのあうをあるそ
ゆう我うわをせれ物波ほう
袖うをせれ物波ほう
逸つゝ行うん
せそれなくさし方もう
恵かんあをまを花うえ
いうんあのほうたまを
花しへ風をぬく変花のゆ
夕日そ深栄うえ叫ふ
みるまつて人工叫ふ
かうこうをれ風うて

行暁嗣院
読人不知
通証法師
大持院
左大臣
祝部
藤原基俊
藤原行尊
従二位有忠
藤原康朝
僧正遍昭
左上天皇
進子内親王
源宗于朝臣

新千載
新拾遺
新千載
彰千載
新千載
彰続古今
彰千載
彰拾遺
風雅
彰拾遺
風雅
新千載

弥生の一日、人々あまた誘ひて、吹上の浜に罷りたりけるに、浜風のいと心地よく吹きければ、

五百重なす羽もの風やさそふらん時ならぬ浦に雪の降るかと

題しらず

よもすがらたえずきこゆる水の音は夢のかよひぢ通ふなりけり

別れてなほ幾年もあらぬにいにしへの人の夢にみえければ

山ぢかくなりぬるままに世の中のうきもしらでぞ年は経にける

立ちかへり我が古郷を来てみれば昔ながらの月ぞすみける

旅の心をよめる

旅ねする袖のみ露に濡れまさる夢路をさへや秋風の吹く

題しらず

思ひ出でよ月の光のさしそめし昔の秋の夜半のちぎりを

旅の心をよめる

旅ねする袖のみ露に濡れまさる夢路をさへや秋風の吹く

題しらず

思ひ出でよ月の光のさしそめし昔の秋の夜半のちぎりを

新千載
新拾遺
新千載
彰千載
新千載
彰続古今
彰千載
彰拾遺
風雅
彰拾遺
風雅
新千載

弥生の一日、人々あまた誘ひて、吹上の浜に罷りたりけるに、浜風のいと心地よく吹きければ、

五百重なす羽もの風やさそふらん時ならぬ浦に雪の降るかと

題しらず

よもすがらたえずきこゆる水の音は夢のかよひぢ通ふなりけり

別れてなほ幾年もあらぬにいにしへの人の夢にみえければ

山ぢかくなりぬるままに世の中のうきもしらでぞ年は経にける

立ちかへり我が古郷を来てみれば昔ながらの月ぞすみける

旅の心をよめる

旅ねする袖のみ露に濡れまさる夢路をさへや秋風の吹く

題しらず

思ひ出でよ月の光のさしそめし昔の秋の夜半のちぎりを

僧正栄伊
二条院讃岐
隆博法師
九条道家
寂蓮法師
従二位家隆
藤原清輔
前大僧正慈円
藤原定家朝臣
権中納言通具
従二位家隆
後鳥羽院
藤原雅経
藤原為家朝臣
藤原為氏
藤原長清
藤原長綱
藤原為家朝臣
藤原為氏
藤原長清
藤原長綱
藤原為家朝臣
藤原為氏
藤原長清
藤原長綱

彰千載
新千載
新拾遺
彰千載
新千載
彰続古今
彰千載
彰拾遺
風雅
新千載

人よりも先に知りぬる秋風を吹きな送りそ宿の萩原

題しらず

秋風に吹きな送りそ我が宿の萩の下葉の色づくまでは

題しらず

秋風に吹きな送りそ我が宿の萩の下葉の色づくまでは

人よりも先に知りぬる秋風を吹きな送りそ宿の萩原

題しらず

秋風に吹きな送りそ我が宿の萩の下葉の色づくまでは

題しらず

秋風に吹きな送りそ我が宿の萩の下葉の色づくまでは

藤原清輔朝臣
前大僧正慈円
藤原定家朝臣
権中納言通具
従二位家隆
後鳥羽院
藤原雅経
藤原為家朝臣
藤原為氏
藤原長清
藤原長綱

藤原清輔朝臣
前大僧正慈円
藤原定家朝臣
権中納言通具
従二位家隆
後鳥羽院
藤原雅経
藤原為家朝臣
藤原為氏
藤原長清
藤原長綱

三百首

彩千 ちみてなつしたゆやらいふかのうらの
彩続古 玉川のうらにてよめるうらやまれをもりを
彩拾冬 くれ井のしみづのこほりにねをもなかれ
彩続古 おもふくなれてこほれるうらなみ

井てのさと人 清輔朝臣
井てのさと人 今乃経一品 新古今同
井をそれそろ 寂蓮法師
井をそれそろ 前参議教長 続古今

の

彩千 春雨のふりしくことと人のいはゝし
彩千 雑中 里人のくゝみもわかく花のえを
新続古 新しきそろみよの井出代にそ
彩千 雑中 いつゝくもりさえそふりみ山ちを
彩抄 雑上 人ふるゝ雪のみ山の住心を
彩千 雑中 名のみ残りしかの跡のをくれて
彩千 雑中 くれなゐの園のおくもさしそめし
風 秋中 虫の声ゝ雨ふりそへて林屏ろ
風 新中 秋風にたなひく雲のまよりもる
風 秋上 彩続古 新上 月をのみ待つゝ人のとふ
風 新下 押しなべてもの悲しきに物ゝ

のかぬまとなる 前大納言為家
のかぬまとなる 大納言師頼
のうらめしき 従二位家
のうらむれて 安嘉門院
のうらむれて 前中納言定家
のうらむれて 参河内侍
のうつる月影 徽安門院
のうつる月影 前参議教長
のくろうて 俊成卿女
のくもゐの 参議通綱
のくもゐの 法皇上人

新拾 秋下
雪を宿して
新拾 春上
山のこ寒そうなる羽ねうちしきて
新続古 春上
もる日さく
新続古 冬
沼茅原
新拾 秋下
淺茅生も
風 交
今朝のくれ一村雨そ
新続古 春上
ふりすぎて
新拾 旅
山のそなたに
新続古 秋上
淋しき
のへの白雪
のへの若菜
のへの月影
のへの月新

風 冬
新千 冬
新千 雜
新千 冬
新拾 秋上
新千 冬
風 冬
新拾 秋上
新千 雜
新千 冬
風 冬
風 秋上
新続古 雜
新拾 秋上
新千 旅上
風 交

詠めてぞまた君て冷し秋三日
さも寒気人なら行淀をまとおもかけれ
河の朝立あるも野辺て寒
をのつゝおもて降も君さして
都やなみのこのもうまれ
新のあるこれ宮こあるもの
冬ごもりのこれ一ぞおもふ
夕日さしの里みて
物や旅ねのまよりもる
羽をあもて花のもとく
焼そて柳の下陰の立
涼しやと風のみやりをあれ

のへの月雪
院次泉
のへの月雪
前中納言
のへの秋萩
宝寿院
のへの月雪
二条院讃岐
のへの風
宝寿院
のへの秋風
源家清
のへの秋雪
大宮大納言
のへの月雪
乗空院
のへの月新
飛鳥井雅有

風 秋上
新続古 秋上
新続古 巻三
新続古 雑上
風 巻下
風 旅
新千 雑上
新拾 冬
新千 春
風 巻七
新々 冬
新続古 冬

ゆくりなくこの方にとまりて、
こく花のもとにやどりて、
ものの折りふしをおもひいでて
秋萩の花をかき折りて
ものをおもひてかきつけ
きりぎりすの鳴く里を
花すすきまねく方に心
ゆくを秋風吹きわけて
定なき人の心もそなた
きをもおきてあさきたの
我もさき立ちぬる道なれば
今宵の人の袖の白露

院御句
祝子成光
参成雅経
源基之
従二位親子
参議隆親
源長舜
前大納言雅冬
前大納言実教
大典侍 勝子
前大納言実教
前大納言実教
前大納言実教

風 巻下
新千 巻下
風 雑上
新々 巻二
新々 巻下
風 巻七
新拾 巻下
新々 巻下
新続古 巻二
新拾 秋上
新続古 巻三

一ちさきわがそでにはかかる風かな
巻風吹きうつるかげを
春ごとに思ふかひのそ
ものの色のそめ
もろこし船のそ
みをしぼりかねつる
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき
ものとてかき

前大納言為兼
花園院御製
左京大夫顕輔
前大納言実教
権中納言公雄
源基之
中務
源基之卿母
花園院御製
法印定円
源基之
従二位親子
前大納言実教
源基之卿母
花園院御製
法印定円
源基之
従二位親子
前大納言実教
源基之卿母
花園院御製
法印定円
源基之
従二位親子
前大納言実教
源基之卿母
花園院御製
法印定円
源基之
従二位親子
前大納言実教

新拾 ごとくて人心をも扱ちのなせのやまの　坂上大嬢
玄抄 風 天教 こほるまで打ち浮べたる池水の　君
新拾 天 なまなかるうたかたもなくて　子蟲上人
風 天教 いつまでもかうありたいと思ふ　法人宗
新続古 天 雨の降らん境までも　春深き
風 天 世を照すとてもいつまでかあるべき　なみ降者
新拾 天 さてもあるべき分ぞなき世なれども　陀仏坊
新拾 天 あるべきほどは仕へてぞ見る　おなじ道
新拾 天 おもひ入れたる人ぞなき　覚空上人
新拾 新中 ありとてもいつまでかあるべきよ　修教師
新続古 天 ありしなのみぞ残りける　入道

新拾 天 ありしよりこの園なる梅の花　第六僧正
新拾 天 あるかなきかにほふ夕暮　永福門院
新続古 天 ありしよりこう袂に思ひそめ　清原元輔
天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　天台座主
新拾 天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　権僧正
新拾 新上 ありしよりなほ恋ひわたるかな　前僧正
風 新中 ありしよりなほ恋ひわたるかな　慈鎮
新拾 新下 ありしよりなほ恋ひわたるかな　覚空上人
新続古 天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　権僧正
新拾 天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　権僧正
新拾 新上 ありしよりなほ恋ひわたるかな　前僧正
新続古 天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　慈鎮
新拾 新中 ありしよりなほ恋ひわたるかな　後京極摂政
新続古 天 ありしよりなほ恋ひわたるかな　前関白

風雜中　まくらわれてふく夜風もさよ深て
風五五　ころもうつ砧の音のうちそへて
新續古藏　ものうき秋の月をみるかな
新拾遺夏　ゆく風よりもとまるわが心
新拾遺恋三　あはれとも思ひしらるやこれもまた
風夏　あはれなく物うき雨の夏の夜に
新續古秋上　秋の雨ふるしの村雨をきくともなく
新拾遺雜上　横ぶえのよわるに山路の露
新拾遺雜秋　おもひたつ雲にをくれて花
風秋下　あさ夏ぶつる物ごとにうとくなり
新古三　いはぬ思ひのつもるともなく
新古五　契りおきしことの葉もいつとなく
のるこそ大
のる琴を
のるかなしも
のるたち花
のるむぐら
のるもみぢ
のる月ぶし
のる月ぶし
のる月ぶし
のる身ぶり
のる風ぶし
のる源家民

前大納言長雅
前中納言実
権大納言経親
源院御製
三位重
在原業平朝臣
前々宰相中将
権中納言国信
源家

新續古雜中　ふるさとをおもふ旅のね
新續古雜　神な月二九ふりぬるうきよかな
新古秋下　ふかき夜の月をかたしく袖
新續古恋三　いでそめし心ぞ成よそんわが方に
新千冬　物ごとにうとくなりゆく山ざとも
風雜上　ふかき夜の月をおもふ袖
新千雜上　ふかき夜の月をおもふ袖
新拾遺雜秋　ふかき夜の月をおもふ袖
風秋下　ふかき夜の月をおもふ袖
風雜中　ふかき夜の月をおもふ袖
新古今夏　ふかき夜の月をおもふ袖
風冬　ふかき夜の月をおもふ袖

のる宿る
のるものの
のる秋風
儀同三司
のる名香
のる白菊
のるこの君
のるこの君
のる一もと
のる藻くづ
のる風ぶし

権大納言資
権中納言為
権大納言為
権大納言為
前中納言為
院御製
前大納言為
前大納言為
権大納言為
前大納言為
前大納言為
前

新拾 雑上
新千 雑下
新続古 雑躰
新続古 恋四
新千 雑中
新続古 秋上
新続古 春下
風 雑二
新続古 春上
風 雑中
新千 夏
新千 雑上
新拾 夏

かすとあるて雪間をわけてもえいつる若草のつまもこもれるくれなゐの花
千早振神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは
思ひのこすことなくちりぬもみぢ葉のゆくへさだめぬ秋の風かな
秋ふかみ露もしぐれもふりぬれば残る梢もなくなりにけり
なきわたるかりのこゑこそかすかなれ雲ゐはるかに月ぞすみのぼる
空あきて月の光ぞ清けき秋の夜ふかくなるまゝに
待人のこぬ夜ふけゆく鐘の音に更行風の身にしみて
なきわたるかりのこゑこそかすかなれ雲ゐはるかに月ぞすみのぼる
神なびのみむろの山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり
吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ

のこりなく
法下定為
宸筆院
おほぬさ
後二条院
村雨の
民部卿
後伏見院
御製
後宇多院
御製
後醍醐院
御製
後光厳院
御製
後小松院
御製

新千 夏
新千 雑上
新拾 雑中
新続古 春上
風 雑中
新千 夏
新拾 夏
新続古 春上
新続古 賀
風 冬

五月雨代くもりてすゞしき夕暮の空
九重にたつもかなしき煙かな都も今は秋風ぞふく
村雨のなごりもしばし梢にて色なき風にちるもみぢ葉
さゝ竹の神のみむろの山風に声うちそふる秋の夕暮
立よりて木ずゑの花を見てしがな雲ゐはるかに匂ふ春風
うたゝねの夢路をさそふ風のおとに目さめて聞く松の夕暮
宿ごとにまくらさだめて旅衣日数ふるにもなれぬ秋風
日影さすそなたの雲の八重むぐら誰ゆゑ匂ふ春の山風
五月雨のふる日ながめをいとふまじ草葉の露の玉ぞまがへる
五月雨のふるやまぬまの水かさにいとゞ増さる恋の淵川
我宿の秋の夕暮誰ゆゑに訪ふ人もなきに虫の音ぞする
降ながむる夕の雨も晴て行のこりなき秋の月かな

後小松院
御製
後二条院
御製
後伏見院
御製
後光厳院
御製
後醍醐院
御製
後宇多院
御製
後伏見院
御製
後光厳院
御製
後小松院
御製
後光厳院
御製

風ふく風のおとは聞えこねども
風ふく冬のゆうべは物ぞ悲しき　永福門院内侍

風ふけばおのれ山の端はなれゆく
雲のあとなき秋の夜の月　藤原為家朝臣

風雅中
風ふけば峰の木の葉のうつろひて
雲もとまらぬ秋の夜の月　西園寺前内大臣女

新拾
新後拾
風ふけばおのれ嵐よりこえて
夕霧晴るる秋の山の端　伏見院御製

新後拾遺